

所ハ何時ニテモ債務者ノ引致ヲ命スルコトヲ得

十

第千四條 管財人カ破産者ノ財産ヲ財産目録ニ載セ且之ヲ占有シタルトキ又ハ
監守ノ事由最早存セザルトキハ裁判所ハ其決定ヲ破産者ヲ釋放ス可シ然レト
モ債務者ヲシテ裁判所又ハ管財人ノ呼出ニ應シ何時ニテモ出頭ス可キ爲メノ
擔保ヲ供スル義務ヲ負ハシムルコトヲ得(同上)

取上ケタル擔保ハ之ヲ財團ニ歸セシム

第千五條 管財人カ債務者ノ財産ヲ財産目録ニ載セ且之ヲ占有シタルトキハ直
チニ其封印ヲ解ケ可シ

第千一條ニ依リ財團ニ加フルコトヲ得サル物及ヒ財團ノ爲メニスル即時ノ換
價又ハ繼續利用ヲ封印ノ爲メ妨ケラルル物ニハ封印ヲ爲ササルコトヲ得此等
ノ物ハ直チニ財産目録ニ載セ管財人ノ占有スルコトヲ要ス
債務者ノ商業帳簿ハ即時之ヲ管財人ニ交付シ且其帳簿ノ現状ハ破産主任官之
ヲ認覽ス

特ニ高價ナル物ハ即時之ヲ管財人ニ交付シ又ハ一時之ヲ裁判所ニ引取ルコト
ヲ得

第千六條 破産者ニ對シテ債務ヲ負ヒ又ハ財團ニ屬スル物ヲ占有スル者ハ其支
拂又ハ交付ヲ管財人ニノミ爲ス可キコトヲ拂渡差押ノ命令ヲ以テ催告セラレ
タルモノトス

別除權ヲ行ハント欲スル者ハ其旨ヲ管財人ニ申出ツ可シ若シ管財人ヨリ其物
ノ評價ヲ爲サンコトヲ求ムルトキハ之ヲ承諾スルコトヲ要ス

債務者ニ宛テタル電信、書狀其他ノ送達物ハ之ヲ管財人ニ交付ス可シ其管財
人ハ開封ノ權ヲ有ス然レトモ其旨趣カ財團ニ關係ナキトキハ管財人ヨリ債務
者ニ引渡スコトヲ要ス

破産裁判所ハ此カ爲メ郵便局、電信局其他ノ運送取扱所ニ必要ナル命令ヲ發
ス可シ

第千七條 破産主任官ハ破産者及ヒ其家族ニ財團ヨリ給養ノ扶助料ヲ與フルコ

破産法 破産、破産處分

十一

第五章 財團ノ管理及ヒ換價

第千八條 各裁判所管轄區ニハ職務上義務ヲ負フ可キ破産管財人ノ名簿ヲ備置
キ破産裁判所ハ各箇ノ場合ニ於テ其名簿中ヨリ管財人ヲ選定ス

第千九條 管財人ノ勤勞ニ對スル報酬ハ財團ヨリ第一ニ之ヲ支拂ヒ其額ハ破産
裁判所之ヲ定ム

第千十條 裁判所ハ何時ニテモ管財人ヲ易ヘ又ハ他ノ管財人ヲ加フルコトヲ得
第千十一條 管財人ハ其行爲ニ付テハ代理人ト同一ノ責任ヲ負フ若シ管財人二
人以上アルトキハ共同ニ非サレハ行爲ヲ爲スコトヲ得ス但破産主任官カ或ル
行爲ニ付キ各箇ニ特別ノ委任ヲ與ヘタルトキハ此限ニ在ラス
第千十二條 管財人ハ破産宣告後即時ニ財團ヲ占有シ且其管理及ヒ換價ニ著手
スルコトヲ要ス

管財人ハ其職務ノ爲メ破産者ノ補助ヲ求ムルコトヲ得破産主任官ハ此カ爲メ
破産者ニ報酬ヲ與フルコトヲ得

第千十三條 管財人ハ破産主任官ノ監督ヲ受ケ且其指揮ニ從フ義務アリ若シ管
財人ノ行爲又ハ決斷ニ對シテ異議ヲ述フル者アルトキハ破産主任官命令ヲ以
テ之ヲ決ス此命令ニ對シテハ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第千十四條 財産目録ハ裁判所職員又ハ其地警察官吏ノ立會ヲ以テ管財人之ヲ
作り若シ必要アルトキハ破産者ヲモ立會ハシム

破産者ニ屬スル總テノ財産ハ財團ニ組入ル可カラサルモノト雖モ其價額ヲ明
示シテ之ヲ財産目録ニ記入スルコトヲ要ス必要ナル場合ニ在テハ其價額ハ鑑
定人ヲシテ之ヲ鑑定セシム

財産目録及ヒ之ニ關スル調書ノ認證アル謄本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判
所ニ之ヲ備フ

檢事ハ其見込ニ因リ職權ヲ以テ財産目録ノ作成ニ立會フコトヲ得

第一千五百條 破産者ニ屬セサル財産ヲ財團ヨリ取戻スコトニ係ル争訟ハ破産裁判所之ヲ裁判シ不動産ニ付テハ其所在地ヲ管轄スル裁判所之ヲ裁判ス

第一千十六條 管財人ハ破産主任官ノ定メタル三十日以内ノ期限ニ破産者ヨリ差出シタル届書及ヒ貸借對照表ヲ調査シ若シ破産者ヨリ之ヲ差出ササリシトキハ自ラ貸借對照表ヲ作り且其報告書ニ貸借對照表ヲ添ヘテ破産主任官ニ提出ス可シ

報告書及ヒ貸借對照表ノ認證アル謄本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ

報告書及ヒ貸借對照表ハ之ヲ檢事ニ送致スルコトヲ要ス

第一千十七條 貸方ノ借方ニ超ユルコト判然ナルトキ又ハ協議契約ノ豫期セラルル間ハ裁判所ハ破産主任官ノ申立ニ因リ且管財人ノ意見ヲ聽キタル後管財人ヲシテ破産者ノ營業ヲ續行セシムル決定ヲ爲スコトヲ得

管財人營業ヲ續行スル場合ニ在テ財團ニ屬スル物ヲ通常ノ營業外ニテ賣却セ

ントスルニハ破産主任官ノ認可ヲ受ケ且讓メ破産者ノ意見ヲ聽クコトヲ要ス
第一千十八條 不動産ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケテ之ヲ賣却スルコトヲ要ス
動産ハ賣却スルヲ通例トスト雖モ破産主任官ノ認可ヲ受ケルトキハ相對ヲ以テ之ヲ賣却スルコトヲ得

賣却ノ手續ハ總テ民事訴訟法ノ規定ニ依ル

第一千十九條 管財人ハ財團ニ屬スル破産者ノ貸方ヲ取立テ及ヒ破産者ノ權利ヲ債務者其他ノ人ニ對シテ主張シ且保全スルコトヲ要ス

管財人ハ左ニ掲タル行爲ニ付テハ破産者ノ意見ヲ聽キ且破産主任官ノ認可ヲ受ケ可シ(二十六年法律第九號ヲ以テ改正)

第一 訴訟ヲ爲スコト

第二 和解契約又ハ仲裁契約ヲ取結フコト

第三 質物ヲ受戻スコト

第四 債權ヲ轉付スルコト

破産法 破産、財團ノ管理及ヒ換價

第五 相續又ハ遺贈ヲ拒絕スルコト

第六 消費借ヲ爲スコト

第七 不動産ヲ買入ルルコト

第八 權利ヲ拋棄スルコト

第九 總テ財團ニ新ナル義務ヲ負ハシムルコト

第二十條 財團ニ收入スル金錢ハ破産主任官ノ定ム可キ常用支出額ノ外運延
ナク之ヲ供託所ニ寄託スルコトヲ要ス其金錢ハ破産主任官ノ支拂命令ニ依ル
ニ非ザレハ支出スルコトヲ得ス

第二十一條 管財人ハ其管財中破産者ニ罰セラル可キ行爲アルヲ知りタルト
キハ之ヲ破産主任官ニ届出ツル義務アリ破産主任官其届出ヲ受ケタルトキハ
之ヲ檢事ニ通知ス

第二十二條 破産主任官ハ破産ノ理由、事情、貸方借方並ニ其對照表其他管理
及ヒ破産手續ニ關スル事項ニ付キ破産者、其商業使用人、雇人其他ノ人ヲ何時

ヲモ訊問スルコトヲ得

第六章 債權者

第一節 債權ノ届出及ヒ確定

第二十三條 破産者ノ總債權者ハ破産決定ノ公告ニ因リ債權届出ノ期間ニ其
債權ヲ破産主任官ニ届出ツ可キ旨ノ催告ヲ受ケタルモノトス其届出ニハ各債
權ノ合法ノ原因及ヒ請求金額若シ優先權アルモノハ其權利ヲ明記シ且證據書
類又ハ其附本ヲ添フ可シ

他所ニ住スル債權者ハ裁判所所在地ニ代人ヲ置ケ可シ

債權及ヒ代人任置ノ届出ハ書面ヲ以テ又ハ調書ニ筆記セシメテ之ヲ爲スコト
ヲ得書面ヲ以テスル場合ニ在テハ二通ヲ差出スコトヲ要ス

所在ノ知レタル債權者ハ右ノ外特ニ裁判所ヨリ書面ヲ以テ其債權届出ノ催告
ヲ受ケ然レトモ其書面カ債權者ニ達セサルモ此カ爲メ損害賠償ノ請求ヲ爲ス

破産法 破産、債權者、債權ノ届出及ヒ確定

コトヲ得ス

十八

第二十四條 届出ハ之ヲ受取リタルトキ直チニ順次番號ヲ付シテ二箇ノ表ニ記載ス可シ其一ニハ優先權アル債權ヲ掲ケ他ノ一ニハ通常ノ債權ヲ掲ケ此債權表ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ

管財人ハ其使用ノ爲メ届出書及ヒ債權表ノ謄本ヲ受領ス

第二十五條 調査會ハ管財人及ヒ成ル可ク破産者ノ面前ニ於テ破産主任官之ヲ開キ且其調査ヲ作ル可シ債權者ハ自身又ハ代理人ヲ以テ此會ニ参加スルコトヲ得

破産主任官ハ債權者ニ取引帳簿若クハ其抜書ヲ提出ヲ命スルコトヲ得調査ノ結果ハ債權表及ヒ提出シタル債務證書ニ附記シ且各債權者又ハ其代理人ニ告知スルコトヲ得

調査會ハ届出期間ノ満了後十日乃至十五日間ニ之ヲ開ケテ通例トス

届出期間ノ満了後ニ届出テタル債權ハ調査會ニ於テ之ヲ調査スルコトヲ得

レトモ其調査ヲ爲スコトニ付キ異議ノ申立アリタルトキ又ハ調査會ノ終リタル後債權ヲ届出テタルトキハ其債權者ノ費用ヲ以テ新ナル調査會ヲ開ク

第二十六條 債權ノ確定ハ承認又ハ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ爲ス

調査會ニ於テ管財人ヨリモ又債權ノ確定シ若クハ貸借對照表ニ掲ケタル債權者ヨリモ異議ヲ申立テサルトキハ債權ハ承認ヲ得タルモノトス

管財人ノ債權ニ係ル承認又ハ異議ハ破産主任官其管財人ニ代ハリテ之ヲ爲ス
第二十七條 異議ヲ受ケタル各債權ハ若シ其債權者之ヲ取消ササルトキハ破産裁判所公廷ニ於テ破産主任官ノ演述ヲ聽キ成ル可ク合併シテ其判決ヲ爲ス可シ其辯論及ヒ判決ハ原告、被告ノ出頭セサルトキト雖モ之ヲ爲ス但其判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第二十八條 判決ハ成ル可ク債權者集會前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス若シ之ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ニ對シテ控訴ヲ爲シタルトキハ裁判所ハ異議ヲ受ケタル債權者ノ右集會ニ加ハルコトヲ許ス可キヤ又幾許ノ金額ニ付キ加ハル

破産法 破産、債權者、債權ノ届出及ヒ確定

十九

コトヲ許スヘキ否ヲ決定ス
債權者ノ優先權ノミカ異議ヲ受ケタルトキハ其債權者ハ通常ノ債權者トシテ
右集會ニ加ハルコトヲ得

第三十九條 債權者正當時期ニ届出テス又ハ債權ノ確定セサル債權者ハ以後
ノ確定ニ因リテ爲ス可キ財團ノ配當ニノミ加ハルコトヲ得然レトモ異議ヲ受
ケテ訴訟中ニ在ル債權及ヒ届出並ニ調査ノ爲メ別段ノ期間ヲ定メラレタル在
外國債權者ノ債權ニ付テハ以前ノ配當ニ於テ其債權ニ歸スル割前ヲ留存ス

第二節 特種ノ債權者

第三十條 主タル債務者ノ破産ニ於テ届出テタル債權ハ協讚契約ノ場合ト雖
モ保證人其他ノ共同義務者ニ對シ其全額ニ付キ之ヲ主張スルコトヲ得又保證
人又ハ共同義務者ハ主タル債務者ノ破産ニ於テ其償還請求ヲ届出タルコトヲ
得然レトモ主タル債務者ノ爲メニスル協讚契約ノ效果ニ從フ

第三十一條 二人以上ノ共同義務者カ破産シタルトキハ其各義務者ノ破産ニ
於テ債權ノ全額ヲ届出タルコトヲ得

各自ノ破産財團ノ間ニ於ケル償還請求權ハ之ヲ主張スルコトヲ得然レトモ
債權者カ受取ル割前ノ額カ主タルモノ及ヒ從タルモノヲ合セタル債權ノ總額
ヲ超過スルトキハ其超過額ハ共同義務者中他ノ共同義務者ニ對シテ償還請求
權ヲ有スル者ノ財團ニ歸ス

第三十二條 左ニ掲ケル債權ハ届出及ヒ確定ニ關スル規定ニ從フコトヲ要セ

第一 裁判費用、管理費用其他破産手續上ノ費用

第二 公ノ手数料及ヒ諸稅

第三 管財人カ財團ノ爲メニ負擔シタル義務ヨリ生スル債權

右債權ハ破産主任官ノ指圖ニ從ヒ通常ノ方法ヲ以テ財團ノ現額ヨリ之ヲ支拂
フ

破産法 破産、債權者、特種ノ債權者

第三十三條 破産手續ニ加ハリタルニ因リテ債權者ニ生シタル費用ハ財團ニ

對シテ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第三十四條 (明治二十六年三月法律第九號ヲ以テ削除)

第三節 債權者集會

第三十五條 債權者集會ハ破産主任官之ヲ招集シ及ヒ之ヲ指揮ス其招集ハ會

議ノ事項ヲ明示スル公告ヲ以テ之ヲ爲ス

其集會ハ管財人ハ債權ノ確定シタル債權者及ヒ第千二十八條ニ依リテ参加ス
ルコトヲ得ヘキ債權者ヨリ成立ス然レトモ優先權ノ確定シタル債權者ハ其優
先權ヲ拋棄シタル限度又ハ優先權ヲ行フニ當リ不足アル可シト推定セラルル
限度ニ於テノニ参加ス

債權者ハ代理人ヲ差出スコトヲ得

破産者ハ之ヲ集會ニ呼出スコトヲ得

第三十六條 決議ハ出席シタル債權者ノ過半數ヲ以テ爲ス其過半

數ハ出席員ノ有スル債權額ノ半ヨリ多キ額ニ當ルコトヲ要ス

第三十七條 集會ニ於テハ破産主任官ハ破産手續ノ從來ノ成行ニ付テノ報告

ヲ爲シ管財人ハ管財ノ處理、其結果及ヒ財團ノ現況ニ付テノ報告ヲ爲ス

集會ハ右ノ報告ニ付テ決議ヲ爲シ若シ破産主任官又ハ管財人ノ意見アリタル
トキハ其意見及ヒ債權者ノ爲シタル申立又ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケテ破産
者ノ爲シタル申立ニ付テ決議ヲ爲スコシ此等ノ決議ハ裁判所ノ認可ヲ受クル
コトヲ要ス

第七章 協諾契約

第三十八條 法律上ノ義務ヲ履行シタル破産者ニシテ有罪破産ノ判決ヲ受ケ

ズ又其審問中ニ在ラサル者ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケ第一ノ集會ニ於テ債權
者ニ協諾契約ヲ提供スルコトヲ得又十分ノ理由アルトキハ以後ノ集會ニ於テ

破産法 破産、協諾契約

モ之ヲ提供スルコトヲ得然レトモ其提供ハ一回ニ限ル

第一ノ集會ハ普通ノ調査會ヨリ四週日後ニ之ヲ爲ス協諧契約ノ申立書ハ少ナクトモ集會ノ二十日前ニ之ヲ裁判所ニ差出シ裁判所ハ之ヲ公衆ノ展閱ニ供シ且其旨ヲ公告ス可シ

第三十九條 協諧契約ヲ承諾スルニハ出席シタル債權者ノ過半數ノ承諾ヲ要ス其過半數ハ議決權アル總債權額ノ四分三以上ニ當ルコトヲ要ス

管財人及ヒ議決權ヲ有スル債權者又後ニ至リ債權ノ確定シタル債權者ハ協諧契約ニ對シテ十日内ニ理由ヲ附シタル異議ヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得

第四十條 債權者ノ承諾シタル協諧契約ハ裁判所ノ認可ヲ得テ始メテ法律上有效トス其認可又ハ棄却ニ付テハ決定ハ破産主任官ノ演述ヲ聽キ前條ノ期間満了後直チニ之ヲ爲ス此決定ニ對シテハ債務者及ヒ異議申立ノ權利アル者ヨリ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四十一條 協諧契約ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ棄却ス可シ

第一 第三十八條及ヒ第三十九條ノ規定ヲ踐行セサルトキ

第二 協諧契約ニ依リ或ル債權者カ其承諾ナクシテ偏頗ノ處置ヲ受ケ損害ヲ被フルトキ

第三 協諧契約カ詐欺其他不正ノ方法ヲ以テ成リタルトキ

第四 協諧契約カ公益ニ觸ルルトキ

第四十二條 協諧契約ハ破産者カ後ニ至リ有罪破産ノ判決ヲ受ケタルトキハ當然消滅シ其審問中ハ免訴又ハ無罪ノ宣告ヲ受ケルマテ之ヲ停止ス

前條第三號ニ掲ケタル理由アルトキハ協諧契約認可ノ後ト雖モ尙ホ之ニ對シテ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第四十三條 協諧契約ノ確定シタルトキハ管財人ハ直チニ其執務ヲ罷メ且其執務ニ付キ計算ヲ爲スコトヲ得

破産者ハ協諧契約ニ別段ノ定ナキトキニ限り任意ノ管理及ヒ處分ノ爲メ其財産ヲ取戻スコトヲ得

破産法 協諧契約

協賛契約ノ履行ハ破産主任官ノ監督ヲ以テ之ヲ爲ス

第千四十四條 協賛契約ヲ棄却セラレ又ハ後ニ至リ消滅シ若クハ取消サルルトキ又ハ不履行ノ爲メ解除セラレルトキハ破産手續ヲ再施シ直チニ財團ノ換價及ヒ配當ヲ爲シテ終局ニ至ラシム其再施シタル手續ニハ再施マテノ間ニ債權ヲ得タル者モ参加スルコトヲ得
不履行ノ場合ニ在テハ協賛契約ノ爲メ立テタル保證人ハ其義務ヲ免カレズ

第八章 配當

第千四十五條 第千三十二條ニ掲ケタル債權及ヒ優先權アル債權ヲ支拂ヒタル後ニ殘レル財團ハ他ノ債權者間ニ平等ノ割合ヲ以テ配當ス

破産者カ資本ヲ分チ數箇ノ營業ヲ爲シタル場合ニ在テハ各營業ニ對スル債權者ハ其營業ニ屬スル財團ヨリ優先權ヲ以テ辨償ヲ受ケ
第千四十六條 配當ハ普通ノ調査會ノ終リタル後ハ配當ニ足ルヘキ財團ノ生シ

ル毎ニ管財人ノ調製シテ破産主任官ノ認可ヲ受ケタル配當案ニ依リテ之ヲ爲ス其案ハ破産主任官之ニ署名シ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ備置キ且其旨ヲ公告ス可シ

配當案ニ對スル異議ハ其公告ノ日ヨリ起算シ十四日內ニ之ヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得

第千四十七條 前條ニ掲ケタル期間ニ配當案ニ對シテ異議ヲ申立ツル者ナキトキ又ハ異議ノ落着シタルトキハ管財人ハ各債權者ヲシテ其債務證書ヲ提出セシメ之ニ毎回ノ支拂額ヲ記入シテ支拂ヲ爲ス若シ債務證書ノ提出ヲ爲スコト能ハサルトキハ破産主任官ノ許可ヲ得テ債權表ニ依リ支拂ヲ爲スコトヲ得孰レノ場合ニ於テモ債權者ハ配當案ニ受取書ヲ記スルコトヲ要ス

第千四十八條 財團ノ換價及ヒ配當ヲ全ク終リタルトキハ債權者集會ヲ開キ此集會ニ於テ管財人ハ終局ノ計算ヲ爲スコシ此計算ノ濟了シタルトキハ裁判所ハ直チニ破産主任官ノ申立ニ因リテ破産手續ノ終結ヲ決定ス此決定ハ之ヲ公

告ス可シ

第四十九條 破産手續終結ノ後ハ辨償ヲ受ケサル債權者ハ破産手續ニ於テ確定シタルニ因リテ得タル權利名義ニ基キ其債權ヲ債務者ニ對シテ無限ニ行フコトヲ得

第九章 有罪破産

第五十條 破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後チ間ハ履行スル意ナキ義務又ハ履行スル能ハサルコトヲ知リタル義務ヲ負擔シタルトキ又ハ債權者ニ損害ヲ被ラシムル意思ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一部分ヲ藏匿シ轉匿シ若クハ脱漏シ又ハ借方現額ヲ過度ニ掲ケ又ハ商業帳簿ヲ毀滅シ藏匿シ若クハ偽造、變造シタルトキハ詐欺破産ノ刑ニ處ス
第五十一條 破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後チ間ハ左ニ掲グルル行爲ヲ爲シタルトキハ過意破産ノ刑ニ處ス

第一 一身又ハ一家ノ過分ナル費用、博奕、空取引又ハ不相應ノ射利ニ因リテ貸方財産ヲ甚シク減少シ若クハ過分ノ債務ヲ負ヒタルトキ

第二 支拂停止ヲ延ハサンカ爲メ損失ヲ生スル取引ヲ爲シテ支拂資料ヲ調ヘタルトキ

第三 支拂停止ヲ爲シタル後支拂又ハ擔保ヲ爲シテ或ル債權者ニ利ヲ與ヘ財團ニ損害ヲ加ヘタルトキ

第四 商業帳簿ヲ秩序ナク記載シ藏匿シ毀滅シ又ハ全ク記載セサルトキ

第五 財産目錄、貸借對照表ノ作成若クハ支拂停止届出ノ義務ヲ怠リタルトキ又ハ裁判所ノ許可ヲ得スシテ其住地ヲ離レタルトキ (明治三十二年三月法律第四十九號ヲ以テ改正)

第五十二條 前二條ノ罰則ハ會社ノ業務擔當ノ任アル社員若クハ取締役及ヒ清算人ニモ之ヲ適用シ又第五十條ノ罰則ハ破産管財人及ビ有罪行爲ヲ行フ際犯者ヲ助ケ又ハ有罪行爲ヲ破産者ノ利益ノ爲メニ行ヒタル者ニモ之ヲ適用
破産法 破産、有罪破産
二十九

×(同上)

第千五十三條 債權者集會ニ於ケル議決ニ關シ債權者ニ賄賂ヲ爲シタルトキハ其雙方チ二年以下ノ重禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十章 破産ヨリ生スル身上ノ結果

第千五十四條 破産宣告ニ受ケタル債務者ハ復権ヲ得ルニ非サレハ會社ノ無限責任社員、舊商法ノ規定ニ從ヒテ設立シタル合資會社ノ業務擔當社員、株式會社ノ取締役若クハ監査役、清算人、破産管財人又ハ商業會議所ノ會員ト爲ルコトヲ得ス(明治三十二年三月法律第四十九號ヲ以テ改正)

第千五十五條 復権ヲ得ルニハ協諾契約ノ調ヒタルト否トヲ問ハズ破産者カ元債、利息及ヒ費用ノ全額ヲ債權者總員ニ辨償シタルユト又所在ノ知レサル爲メ未タ辨償ヲ受ケサル債權者ニ全額ヲ辨償スル準備及ヒ資力アルコトヲ證明ス可シ

復権ノ申立ニハ債權者ノ受取證其他必要ナル證據物ヲ添フ可シ(明治三十二年三月法律第四十九號ヲ以テ第三項ヲ削除)

第千五十六條 復権ノ申立アリタルトキハ破産裁判所ハ異議アル者ヲシテ二个月ノ期間ニ異議ヲ起サシメシカ爲メ裁判所ノ揭示場ト取引所トニ其旨ヲ揭示シ且裁判所ノ見込ニ因リ新聞紙ヲ以テ之ヲ公告シ又調査及ヒ捜査ヲ爲サシメシカ爲メ之ヲ檢事ニ通知ス可シ
裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後復権ノ申立ヲ許可スルト否トヲ決定ス此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得確定シタル決定ハ之ヲ公告ス
棄却セラレタル申立ハ一年ノ滿了前ニハ再ヒ之ヲ爲スコトヲ得ス

第千五十七條 復権ハ債務者ノ死亡後ト雖モ之ヲ許ス

第千五十八條 復権ハ詐欺破産ノ爲メニ判決ヲ受ケタル破産者又ハ重罪、輕罪ノ爲メニ對奪公權若クハ停止公權ヲ受ケテ其時間中ニ在ル破産者ニハ之ヲ許ス

破産法 破産、破産ヨリ生スル身上ノ結果

過急破産ノ場合ニ在テハ復権ノ刑ノ滿期ト爲リ又ハ恩赦ヲ得タル後ニ非サル
ハ之ヲ許サス

第十一章 支拂猶豫

第五十九條 商人カ商行爲ニ因リテ生シタル債務ニ付テ自己過失ナクシテノ
支拂ヲ中止セサルコトヲ得サルニ至リタル場合ニ於テ其債權者ノ過半数以上
ノ承諾ヲ得サルトキハ營業所ノ所在地又ハ住所地ヲ管轄スル裁判所ハ一年ヲ
超エサル範圍内ニ於テ支拂猶豫ヲ與フルコトヲ得(明治三十二年法律第四十
九號ヲ以テ改正)

第六十條 支拂猶豫ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ添附スルコトヲ要ス

- 第一 支拂中止ノ事由ノ完全ナル明示
- 第二 貸借對照表、財産目錄及ヒ住所ト債權額トヲ明示シタル債權者名簿
- 第三 債權者ニ主タルモノ及ヒ從タルモノノ完全ナル辨償ヲ爲シ得ル方法

期間及ヒ此方爲メ供スルコトヲ得ル擔保ノ證明

右申立及ヒ添附書類ハ公衆ノ展覧ニ供スル爲メ之ヲ裁判所ニ備置キ且債權者
ノ集會期日ヲ定メテ之ト共ニ其備置キタル旨ヲ公告スルコトヲ要ス債權者ハ
集會ノ爲メ各別ニ招集ヲ受ケ

支拂猶豫ハ裁判所ヨリ假ニ之ヲ許可スルコトヲ得

第六十一條 集會期日ニ於テハ裁判所ヨリ任セラレタル主任判事ノ上席ヲ以
テ債務者ト債權者トノ間ニ支拂猶豫ノ申立ニ付キ辯論ヲ爲ス其申立ヲ承諾ス
ルニハ第六十二條ニ掲ケタル過半数ヲ要ス其辯論及ヒ議決ニ付テハ調書ヲ
作ル可シ

第六十二條 裁判所ハ承諾ヲ得タル支拂猶豫ノ認否ニ付キ主任判事ノ演述ヲ
聽キテ決定ヲ爲ス此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

支拂猶豫ハ申立ニ因リテ前數條ノ手續ニ從ヒ一回ニ限り之ヲ延長スルコトヲ
得然レトモ其期間ハ一年ヲ超ユルコトヲ得ス

破産法 破産、支拂猶豫

第六十三條 債務者有救ナル支拂猶豫ヲ得タルトキハ猶豫期間中其以前ニ取
結ビタル商取引ヨリ生スル債權ノ爲メニ強制執行及ヒ破産宣告ヲ受ケルコト
無シ但猶豫契約ノ履行及ヒ業務ノ施行ニ關シテハ主任判事ノ監督ヲ受ケ
債務者ノ保證人及ヒ共同義務者ノ義務ハ右猶豫ノ爲メニ變更スルコト無シ
第六十四條 支拂猶豫ノ承諾ヲ得ス若クハ裁判所之ヲ棄却シタルトキ又ハ後
日ニ至リ債務者ノ詐欺若クハ不正ノ爲メ若クハ法律上ノ條件ノ缺クルガ爲メ
之ヲ廢止シタルトキ又ハ債務者ニ於テ其猶豫契約ヲ履行セサルトキ又ハ其豫
期間中債務者ノ財産ニ付キ他ノ債權者ヨリ強制執行ヲ爲ス下キハ直チニ債務
者ニ對シテ破産手續ヲ開始ス此場合ニ於テハ支拂猶豫申立ノ日附ヲ以テ支拂
停止ノ日ト定ム

破産法畢

舊商法施行條例

(明治二十三年八月 法律第五十九號)

朕商法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

(三十二年法律第四十九號商法施行法第百四十七條ヲ以テ左記條項ヲ除ク外廢止)

第二十條 商法及ヒ本條例ニ依リ發スル命令書ヲ送達スル場合ニ於テハ其手續ハ民事訴訟法ノ手續ニ從フ

第二十一條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第二百二十七條、第三百十

一條、第二百三十三條、第二百五十條及ヒ第二百六十一條並ニ本條例第二條

及ヒ第五條ニ依リ裁判所ニ於テ命令ヲ發スルトキハ當事者ヲシテ説明ヲ爲サ

シムル爲メ之ヲ裁判所ニ呼出スヲ通例トス但當事者缺席スルモ命令書ハ之ヲ

發スルコトヲ得(本條以下△印ヲ付スルモノハ舊商法ニ依ルヘキ場合ニ於テ

ノミ效力ヲ存ス)

舊商法施行條例

△第二十二條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第二百二十七條及第二百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ命令ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所ハ豫メ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

檢事ハ口頭又ハ書面ヲ以テ意見ヲ陳述スルコトヲ得

△第二十三條 檢事ハ前條第一項ノ場合ニ於ケル命令ニ付キ其執行ノ責ニ任ス

第二十四條 商法及ヒ本條例ニ依リ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ其期間ハ裁判所ノ送達ヲ受ケタル日ノ翌日又ハ裁判ノ言渡ヲ受ケタル日ノ翌日ヨリ起算シテ七日トス

第二十五條 前條ニ掲ケタルモノノ外抗告ニ關スル手續ニ付テハ民事訴訟法第四百五十五條、第四百六十條第一項第二項、第四百六十五條及ヒ第四百六十六條第一項第二項第四項ヲ除ク外總テ同法第三編第三章ノ規定ヲ準用ス
第三十四條 商法第八百三十六條及ヒ第九百三十四條ニ官卜稱スルハ内國ニ於

テハ區裁判所外國ニ於テハ日本領事若シ領事ナキトキハ其地ノ官廳トス

第三十五條 司法大臣ハ各地方裁判所ノ意見ヲ聽キ其所轄地方ノ需用ニ應ジテ破産管財人ヲ命シ地方裁判所ハ之ニ依リ破産管財人名簿ヲ作ル可シ

第三十六條 破産管財人タルノ命ヲ受ケタル者ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十七條 破産管財人ノ任期ハ三年トス但再任セラルルコトヲ得

第三十八條 名簿中ノ破産管財人破産裁判所ヨリ選定セラレタルトキハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十九條 破産管財人ハ其職務ニ著手スル前公平誠實ニ其職務ヲ執ルコトヲ誓フ可シ

第四十條 破産管財人ハ其擔任スル破産手續中任期滿タルモ之ヲ終結スルマテ解任スルコトヲ得ス

第四十一條 破産裁判所ハ忌避其他該事件ニ不適當ナルノ理由アリテ名簿中ノ
舊商法施行條例

四

破産管財人ヲ選定ス可カラスト認ムルトキハ他ニ破産管財人ヲ選定スルコトヲ得此場合ニ於テハ直チニ其旨ヲ司法大臣ニ上申ス可シ

前項ノ破産管財人モ名簿中ノ破産管財人ト同一ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十二條 職務執行ノ不當又ハ不正ノ爲メ管財人ノ職ヲ解クトキハ破産裁判所ノ公廷ニ於テ其理由ヲ付シテ之ヲ言渡ス可シ

第四十三條 管財人ノ報酬ハ一破産手續ノ全體ニ付キ又ハ收入シタル價額ノ割合ニ應シテ之ヲ定メ財團ノ配當アル毎ニ其歩割ヲ以テ之ヲ支拂フ可シ

第四十四條 第三十六條及ヒ第三十八條ノ規定ニ違フ者ハ刑法第百七十九條ノ罰金ニ處ス

第四十五條 商法第千三條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ監守セントスルトキハ其命令書ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ債務者ノ住所ヲ管轄スル警察官署ニ命シ其處分ヲ爲サシム(二十六年法律第九號ヲ以テ改正)

第四十八條 監守ヲ爲ストキハ警察官吏ヲシテ債務者ノ住所ニ就キ其逃走者ヲ

ハ財産ノ隠匿ヲ豫防シ且破産主任官ノ許可ヲ得タルトキノ外其債務者ノ外人ト面接者クハ通信スルヲ禁セシム (同上)

第四十九條 商法第千三條第三項ニ例リ債務者ヲ引致スルトキハ特ニ作リタル引致狀ヲ以テ之ヲ執行ス但其執行ハ刑事訴訟法ニ定メタル勾引狀執行ノ手續ニ準ス (同上)

第五十條 商法第千四條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ釋放スルトキハ決定書ヲ檢事ニ送達シ其執行ヲ爲サシム

△第五十一條 商法中非訟事件ニ關スル裁判所管轄ハ裁判所構成法ニ定ムルモノ、外第二百五十四條、第三百七十一條、第四百四十一條、第四百九十九條、第五百十四條、第八百十六條、第九百二條ノ事件ニ付テハ區裁判所トシ其他ノ事件ニ付テハ地方裁判所トス

商事非訟事件印紙法

(明治二十三年八月) 法律第六十六號

朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

(三十一年勅令第四百十號ヲ以テ訴訟用印紙ヲ貼用スヘキ場合ニハ收入印紙ヲ用ユヘキコトト定ム)

第一條 商法中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ民事訴訟用印紙ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
第五條第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 左ニ掲ケルモノニ付テハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

- 一 抗告又ハ假差押ノ申立

商事非訟事件印紙法

二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立

三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲ケルモノニ付テハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告ニ對スル答辯

二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應ジ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル債務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ控除ス可キモノトス

財團ノ價額五圓マテ

四十錢

同 十圓マテ

六十錢

同 二十圓マテ

一圓二十錢

同 五十圓マテ

三圓

同 七十五圓マテ

四圓四十錢

同 百圓マテ

六圓

同 二百五十圓マテ

十三圓

同 五圓マテ

二十圓

同 七百五十圓マテ

二十六圓

同 千圓マテ

三十圓

同 二千五百圓マテ

四十圓

同 五千圓マテ

五十圓

同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金額高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ

商事非訟事件印紙法

第六條 協同契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テ 民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス

民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ既觸セサルモノニ限リ之ヲ適用ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル保險業法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十三年三月二十日

内閣總理大臣	侯爵	山縣有朋
司法大臣		清浦奎吾
農商務大臣		曾根龍助

保險業法

第一章 總則

第一條 保險事業ハ主務官廳ノ免許ヲ受クルニ非サレハ之ヲ營ムコトヲ得ス

第二條 保險事業ハ株式會社又ハ相互會社ニ非サレハ之ヲ營ムコトヲ得ス

第三條 保險會社ハ他ノ事業ヲ兼ムルコトヲ得ス

第四條 同一ノ會社ニシテ生命保險ト損害保險トヲ併セテ其目的ト爲スコトヲ得ス

第五條 損害保險ヲ目的トスル會社方免許ヲ申請スルニハ申請書ニ左ノ書類ヲ添附スルコトヲ要ス

一 定款

二 事業方法書

三 普通保險約款

保險業法 總則

（以下は右頁の続きと思われる）

四 保險料及ヒ責任準備金算出ノ基礎ニ關スル書類

二

第六條 生命保險ヲ目的トスル會社カ免許ヲ申請スルニハ申請書ニ前條ニ掲ケタル書類及ヒ責任準備金利用ノ方法ヲ記載シタル書類ヲ添付スルコトヲ要ス

第七條 普通保險約款ニハ左ニ掲ケタル事項ヲ定ムルコトヲ要ス

- 一 保險會社カ保險金額ノ支拂ヲ爲スヘキ事由
- 二 保險契約無効ノ原因
- 三 保險會社カ其義務ヲ免ルヘキ事由
- 四 保險會社ノ義務ノ範圍ヲ定ムル方法及ヒ其義務履行ノ時期
- 五 保險契約者又ハ被保險者カ其義務不履行ノ爲メニ受クヘキ損失
- 六 保險契約ノ全部又ハ一部ノ解除ノ原因及ヒ其解除ノ場合ニ於テ當事者ノ有スル權利義務
- 七 保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ノ利益又ハ剩餘金ノ分配ニ與カル權利ノ有無及ヒ範圍

第八條 第五條及ヒ第六條ニ掲ケタル書類ヲ變更スルニハ主務官廳ノ認可ヲ得ルコトヲ要ス

第九條 保險會社ノ業務ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス
主務官廳ハ本法及ヒ第五條並ニ第六條ニ掲ケタル書類ノ規定ニ從ハシムル爲メ必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十條 主務官廳ハ何時ニテモ保險會社ヲシテ其事業ノ報告ヲ爲サシメ又ハ會社ノ業務及ヒ會社財産ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得

第十一條 主務官廳カ保險會社ノ業務又ハ會社財産ノ狀況ニ依リ其事業ノ繼續ヲ困難ナリト認ムルトキハ其事業ノ停止ヲ命シ又ハ期間ヲ定メテ義務履行ノ方法若クハ計算ノ基礎ノ變更ヲ命シ其他保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ノ權利ヲ保護スルニ必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十二條 保險會社カ主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキハ主務官廳ハ事業ノ停止若クハ取締役ノ改選ヲ命シ又ハ免許ヲ取消スコトヲ得

保險業法 總則

三

第十三條 保險會社ノ清算ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス
主務官廳ハ何時ニテモ前項ノ監督ニ必要ナル検査ヲ爲スコトヲ得

第二章 株式會社

第十四條 保險ヲ營業トスル株式會社ノ定款ニハ商法第二百十條第二號乃至第
八號ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 保險ノ種類及ヒ營業ノ範圍

二 設立費用償却ノ方法

第十五條 會社ハ其商號ニ保險ノ種類ヲ示スコトヲ要ス

第十六條 會社ノ資本ハ十萬圓ヲ下ルコトヲ得ス

第十七條 株式申込證ニハ第十四條及ヒ商法第二百二十六條第二項ニ掲ケタル事
項ヲ記載スルコトヲ要ス

第十八條 會社ハ第十四條及ヒ商法第四百四十一條第一項ニ掲ケタル事項ヲ登記

スルコトヲ要ス

第十九條 第五十八條ノ規定ハ株式會社ノ計算ニ之ヲ準用ス但設立費用及ヒ營
業費ノ金額ヲ償却シタル後ニ非サレハ利益ノ配當ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條 商法第二百十條ノ規定ハ保險ヲ營業トスル株式會社ニハ之ヲ適用セ

第二十一條 會社カ營業ノ免許ヲ取消サレタルトキハ之ニ因リテ解散ス

第二十二條 會社カ合併シテ決議ヲ爲シタルトキハ合併契約書及ヒ各會社ノ財產

目録並ニ貸借對照表ヲ損害保險ニ在リテハ各被保險者ニ生命保險ニ在リテハ
各保險契約者ニ送付シ異議アラハ一定ノ期間内ニ之ヲ述フヘキ旨ノ催告ヲ發

スルコトヲ要ス但其期間ハ二个月ヲ下ルコトヲ得ス

被保險者又ハ保險契約者カ前項ノ期間内ニ會社ノ合併ニ對シテ異議ヲ述ヘサ

ラシトキハ之ヲ承認シタルモノト看做ス

異議ヲ述ヘタル者ノ保險金額カ會社ノ保險金額ノ十分ノ一以上ナルトキハ會

保險業法 株式會社

九 會社カ公告ヲ爲ス方法

十 存立時期又ハ解散ノ事由ヲ定メタルトキハ其時期又ハ事由

第二十七條 相互會社ハ其名稱ニ保險ノ種類ヲ示シ且之ニ相互會社ナル文字ヲ

附スルコトヲ要ス

第二十八條 相互會社ノ基金ハ十萬圓ヲ下ルコトヲ得ス

基金ノ支拂ハ金錢以外ノ財産ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十九條 相互會社ノ社員ノ數ハ百人ヲ下ルコトヲ得ス

第三十條 發起人ニ非サル者カ社員タラントスルトキハ入社申込證ニ通ニ保險

ノ目的及ビ保險金額ヲ記載シ之ニ署名又ハ記名捺印スルコトヲ要ス但會社カ
主タル事務所ノ所在地ニ於テ設立ノ登記ヲ爲シタル後社員タラントスル者ハ
此限ニ在ラス

入社申込證ハ發起人之ヲ作り之ニ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要シ
一 定款作成ノ年月日

二 第二十六條ニ掲ケタル事項

三 基金ノ騰出者ノ氏名、住所及ヒ其各自カ騰出スル金額

四 發起人ノ氏名、住所

五 發起人カ報酬ヲ受クヘキトキハ其報酬ノ額

六 設立ノ際募集セントスル社員ノ數

第三十一條 社員カ豫定ノ數ニ滿チタルトキハ發起人ハ遲滞ナク創立總會ヲ招
集スルコトヲ要ス

創立總會ニ於テハ社員ノ半數以上出席シ其四分ノ三以上ノ同意ヲ以テ一切ノ
決議ヲ爲ス

第四十三條及ヒ商法第五十六條第一項、第二項、第六十二條第三項、第

四項、第六十三條ノ規定ハ相互會社ノ創立總會ニ之ヲ準用ス

第三十二條 社員カ豫定ノ數ニ滿チタル後六个月内ニ發起人カ創立總會ヲ招集

セサルトキハ申込人ハ其申込ヲ取消スコトヲ得

保險業法 相互會社 設立

第三十三條 相互會社ハ創立總會ノ終結ニ因リテ成立ス

第三十四條 取締役ハ創立總會終結ノ日ヨリ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ左ノ事項ヲ登記スルコトヲ要ス

一 第二十六條第一號、第二號及ヒ第四號乃至第十號ニ掲ケタル事項
二 事務所

三 取締役及ヒ監査役ノ氏名、住所
前項ニ掲ケタル事項中ニ變更ヲ生シタルトキハ二週間内ニ各事務所ノ所在地ニ於テ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

第三十五條 商法第九條、第十一條乃至第十五條、第十九條乃至第三十八條、第四十條、第四十一條、第四十四條、第四十五條、第一百十九條、第三百三十三條及ヒ第三百三十八條ノ規定ハ相互會社ニ之ヲ準用ス

第二節 社員ノ權利義務

第三十六條 社員ハ會社ノ債權者ニ對シ直接ニ義務ヲ負フコトナシ

第三十七條 會社ノ債務ニ關スル社員ノ責任ハ左ノ三種トス

一 社員ノ全員カ無限ノ責任ヲ負フモノ
二 社員ノ全員カ保險料ヲ限度トシテ責任ヲ負フモノ
三 社員ノ全員カ保險料ノ外一定ノ金額ヲ限度トシテ責任ヲ負フモノ

第三十八條 社員ハ會社ニ拂込ムべき金額ニ付キ相殺ヲ以テ會社ニ對抗スルコトヲ得ス

第三十九條 社員カ保險料ノ外會社ノ債務ニ關シ贖出スヘキモノアルトキハ其金額及ヒ其贖出ノ方法ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

第四十條 損害保險ヲ目的トスル相互會社ハ社員カ保險ノ目的ヲ贖渡シタルトキハ讓受人ハ會社ノ承諾ヲ得テ讓渡人カ權利義務ヲ承繼スルコトヲ得

第四十一條 生命保險ヲ目的トスル相互會社ハ社員ハ會社ノ承諾ヲ得テ他人ヲシテ其權利義務ヲ承繼セシムルコトヲ得

保險業法 相互會社 社員ノ權利義務

第三節 會社ノ機關

第四十二條 相互會社ニ定款ヲ以テ社員總會ニ代ハルベキ機關ヲ設クルコトヲ得此機關ニハ社員總會ニ關スル規定ヲ準用ス

第四十三條 社員ハ總會ニ於テ各一個ノ議決權ヲ有ス但定款ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラズ

第四十四條 十分ノ一以上ノ社員ハ總會ノ目的及ヒ其招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ取締役ニ提出シテ總會ノ招集ヲ請求スル得但此權利ヲ行使ニ付キ定款ヲ以テ他ノ標準ヲ定ムルコトヲ得

商法第六十條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四十五條 商法第五十六條第一項、第二項、第五十七條第一項、第五十八條第一項、第五十九條、第六十一條第一項、第三項、第四項及ヒ第六十二條ノ規定ハ相互會社ノ社員總會ニ之ヲ準用ス

第四十六條 取締役及ヒ監査役ハ社員總會ニ於テ之ヲ選任ス

第四十七條 取締役及ヒ監査役ハ社員タルコトヲ要セス

第四十八條 取締役ハ社員總會ノ認許アルニ非サレハ同種ノ保險ヲ目的トスル他ノ會社ノ無限責任社員、業務擔當社員、取締役又ハ監査役ト爲ルコトヲ得

第四十九條 取締役ハ社員名簿ヲ備ヘ之ニ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 社員ノ姓名、住所

二 各社員ノ保險契約ノ種類、保險金額及ヒ保險料

三 第三十七條第三號ノ場合ニ於テ各社員ノ責任ノ限度

第五十條 取締役ハ定款及ヒ總會ノ決議録ヲ各事務所ニ備ヘ置キ且社員名簿ヲ

主タル事務所ニ備ヘ置クコトヲ要ス

社員及ヒ會社ノ債權者ハ事業時間内何時ニテモ前項ニ掲ケタル書類ノ閲覧ヲ

求ムルコトヲ得

第五十一條 社員總會ニ於テ取締役ニ對シテ訴ヲ提起スルコトヲ決議シタルトキ又ハ之ヲ否決シタル場合ニ於テ十分ノ一以上ノ社員カ之ヲ監査役ニ請求シタルトキハ會社ハ決議又ハ請求ノ日ヨリ一个月内ニ訴ヲ提起スルコトヲ要ス但起訴ノ請求ヲ爲ス者ニ付キ定款ヲ以テ他ノ標準ヲ定ムルコトヲ得前項ノ請求ヲ爲シタル社員ハ監査役ノ請求ニ因リ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス

會社カ敗訴シタルトキハ右ノ社員ハ會社ニ對シテノミ損害賠償ノ責ニ任ズ
第五十二條 前條ノ請求ヲ爲シタル社員ハ特ニ會社ノ代表者ヲ指定スルコトヲ得

第五十三條 商法第六十五條乃至第六十七條、第六十九條、第七十條、第七十四條第三項、第七十六條、第七十七條及ヒ第七十九條ノ規定ハ相互會社ノ取締役ニ之ヲ準用ス
第五十四條 社員總會ニ於テ監査役ニ對シテ訴ヲ提起スルコトヲ決議シタルト

キ又ハ之ヲ否決シタル場合ニ於テ十分ノ一以上ノ社員カ之ヲ取締役ニ請求シタルトキハ會社ハ決議又ハ請求ノ日ヨリ一个月内ニ訴ヲ提起スルコトヲ要ス此場合ニ於テハ第五十一條第一項但書、第五十二條及ヒ商法第八十五條第一項但書ノ規定ヲ準用ス
前項ノ請求ヲ爲シタル社員ハ取締役ノ請求ニ因リ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス
會社カ敗訴シタルトキハ右ノ社員ハ會社ニ對シテノミ損害賠償ノ責ニ任ズ
第五十五條 商法第六十七條、第七十九條乃至第八十四條、第八十五條第一項、第八十六條及ヒ第八十八條ノ規定ハ相互會社ノ監査役ニ之ヲ準用ス

第四節 會社ノ計算

第五十六條 基金ハ每事業年度ノ剩餘金ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ償却スルコト
保險業法 相互會社 會社ノ計算

トテ得ル基金ノ釀出者ニ支拂フヘキ利息亦同シ
第五十七條 相互會社ハ損失ノ填補ニ備フル爲メ毎事業年度ノ剩餘金中ヨリ準備金ヲ積立ツルコトヲ要ス

毎年積立ツヘキ金額及ヒ準備金ノ最低額ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條 設立費用及ヒ初ノ五年度ノ營業費ハ十年ヲ超エサル期間内ニ於テ定款ノ定ムル所ニ從ヒ毎年其一部ヲ償却スルコトヲ得

第五十九條 設立費用及ヒ初ノ五年度ノ營業費ノ全額ヲ償却シ且第五十七條ノ準備金ヲ控除シタル後ニ非サレハ基金ヲ償却シ又ハ剩餘金ノ分配ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ハ前條ノ期間内ニ於テ基金ノ釀出者ニ利息ヲ支拂フコトヲ妨ケス
第六十條 基金ヲ償却スルトキハ其償却スル金額ト同一ノ金額ヲ積立ツルコトヲ要ス

第六十一條 剩餘金ハ定款ニ別段ノ定ナキトキハ各事業年度ノ終ニ於ケル社員

ニ之ヲ分配ス

第六十二條 商法第九十條乃至第九十三條ノ規定ハ相互會社ノ計算ニ之ヲ準用ス

第五節 定款ノ變更

第六十三條 定款ノ變更ハ社員總會ノ決議ニ依リテノミ之ヲ爲スコトヲ得但其決議ノ認可ヲ得ルニ付キ必要ナル變更ハ社員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ取締役ニ委任スルコトヲ得

第三十一條第二項ノ規定ハ前項ノ決議ニ之ヲ準用ス

第六十四條 會社ノ債務ニ關スル社員ノ責任ヲ減少セントスルトキハ商法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ從フコトヲ要ス

第六節 社員ノ退社

保險業法 相互會社 定款ノ變更 社員ノ退社

第六十五條

定款ヲ以テ會社ノ存立時期ヲ定メタルト否トテ間ハス社員ハ事業年度ノ終ニ於テ退社ヲ爲スコトヲ得但六ヶ月前ニ其豫告ヲ爲スコトヲ要ス

第六十六條

社員ハ左ノ事由ニ由リテ退社ス

- 一 定款ニ定メタル事由ノ發生
- 二 死亡
- 三 破産

四 保險關係ノ消滅

第六十七條

退社員ハ定款又ハ保險約款ノ定ムル所ニ從ヒ其權利ニ屬スル金額ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得

第六十八條

退社員ノ權利ニ屬スル金額ノ拂戻ハ事業年度ノ終ヨリ六ヶ月前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

退社員ノ拂戻請求權ハ前項ノ期間經過ノ後二年間之ヲ行ハサルトキハ時效ニ由リテ消滅ス

第六十九條

退社員ノ權利ニ屬スル金額ノ計算ヲ爲スニ當タリ會社ニ現存スル財産ヲ以テ會社ノ債務ヲ辨濟スルニ足ラサルトキハ退社員ハ其負擔ニ歸スルキ損失額ヲ拂込ムコトヲ要ス

第七十條

退社員カ會社ニ對シテ負擔シタル債務ノルトキハ會社ハ其退社員ニ拂戻スヘキ金額ノ中ヨリ其債務ノ金額ヲ控除スルコトヲ得

第七十一條

無限責任ヲ負フ社員及ヒ保險料ノ外一定ノ金額ヲ限度トシテ責任ヲ負フ社員ハ登記所ニ備フル社員名簿ニ退社ノ記載ヲ爲ス前ニ生シタル會社ノ債務ニ付キ其記載後二年間責任ヲ負フ

前項ノ規定ハ第四十條及ヒ第四十一條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第七節 解散

第七十二條

相互會社ハ左ノ事由ニ因リテ解散ス

- 一 存立時期ノ滿了其他定款ニ定メタル事由ノ發生

二 社員カ百人未満ニ減シタルコト

三 社員總會ノ決議

四 合併

五 破産

六 免許ノ取消

第七十三條 任意ノ解散及ヒ合併ノ決議ハ總社員ノ半數以上出席シ其四分ノ三ノ同意ヲ以テ之ヲ爲ス

前項ノ決議ハ主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其效力ヲ生ゼズ

第七十四條 合併ノ認可ヲ申請スルニハ申請書ニ合併契約書、財産目録及ヒ貸借對照表ヲ添附スルコトヲ要ス

第七十五條 商法第七十六條及ヒ第七十八條乃至第八十二條ノ規定ハ相互會社ニ之ヲ進用ス

第八節 清算

第七十六條 相互會社カ解散シタルトキハ合併及ヒ破産ノ場合ヲ除ク外本節ノ規定ニ從ヒテ清算ヲ爲スコトヲ要ス

第七十七條 會社カ免許ノ取消ニ因リテ解散シタルトキハ裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ清算人ヲ選任ス

第七十八條 會社カ第七十二條第二號、第三號又ハ第六號ニ掲ケタル事由ニ因リテ解散シタルトキハ保險金額ヲ支拂フヘキ事由カ解散ノ時ヨリ一个月内ニ生シタルトキニ限り保險金額ヲ支拂フコトヲ要ス

前項ノ期間經過ノ後ハ損害保險ヲ目的トスル會社ニ在リテハ未タ經過セザル期間ニ對スル保險料、生命保險ヲ目的トスル會社ニ在リテハ被保險者ノ爲メニ積立テタル金額ヲ拂戻スコトヲ要ス

第七十九條 清算人ハ左ノ順序ニ從ヒテ會社財産ヲ處分スルコトヲ要ス

- 一 一般ノ債務ノ辨濟
- 二 社員ノ保險金額及ヒ前條第二項ノ規定ニ依リテ社員ニ拂戻スヘキ金額

保險業法 相互會社 清算

ノ支拂

三 基金ノ償却

社員ハ保險料ノ外基金ノ償却ニ付キ責任ヲ負フコトナシ

第八十條 殘餘財産ハ定款ニ別段ノ定ナキトキハ剩餘金ノ分配ト同一ノ割合ヲ

以テ之ヲ社員ニ分配ス

第八十一條 重要ナル事由アルトキハ裁判所ハ監査役又ハ十分ノ一以上ノ社員

ノ請求ニ因リ清算人ヲ解任スルコトヲ得但此請求ヲ爲ス社員ニ付キ定款ヲ以テ他ノ標準ヲ定ムルコトヲ得

第八十二條 第四十四條、第五十一條、第五十四條、商法第八十四條、第九十

條乃至第九十三條、第九十七條、第九十九條、第五百十九條、第六十三條、

第七十六條、第七十七條、第八十一條、第八十三條、第八十四條、

第八十五條第一項、第九十三條、第九十六條、第九十七條、第

二百二十八條第一項、第二百三十條第一項、第二百三十一條乃至第二百三十

三條及ヒ民法第七十九條、第八十條、第八十三條ノ規定ハ相互會社ノ清算ノ場合ニ之ヲ準用ス

第九節 補則

第八十三條 各登記所ニ相互保險會社登記簿ヲ備フ

第八十四條 相互會社ノ設立及登記ハ總取締役及ヒ總監査役ノ申請ニ因リテ之

ヲ爲ス

申請書ニハ左ノ書類ヲ添附スルコトヲ要ス

一 定款

二 社員名簿

三 社員ヲ募集シタル場合ニ於テハ各社員ノ入社申込證

四 主務官廳ノ免許書又ハ其認證アル贈本

五 創立總會ノ決議錄

保險業法 相互會社 補則

第八十五條 相互會社ノ社員名簿ハ登記簿ノ一部ト看做シ社員名簿ニ爲シタル記載ハ之ヲ登記ト看做ス但之ヲ公告スルコトヲ要セス

第八十六條 相互會社ノ支配人ノ選任ノ登記ハ取締役ノ申請ニ因リテ之ヲ爲ス

前項ノ規定ハ支配人ノ代理權ノ消滅又ハ解任ノ登記ヲ申請スル場合ニ之ヲ準用ス

第八十七條 相互會社カ免許ノ取消ニ因リテ解散シタルトキハ登記所ハ主務官廳ノ囑託ニ因リテ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

第八十八條 第八十四條第一項ノ規定ハ相互會社ノ解散又ハ其合併ニ因ル變更若クハ設立ノ登記ノ申請ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第八十九條 非訟事件手續法第二百二十六條第一項、第三項、第三百二十六條乃至第三百二十九條、第四百十一條乃至第四百六十五條、第四百七十三條、第四百七十四條第二項、第四百七十五條乃至第四百七十八條、第四百八十八條、第四百九十三條第

一項、第二項及ヒ第四百九十四條ノ規定ハ相互會社ニ之ヲ準用ス

第九十條 相互會社カ登記ヲ爲ス場合ニ於テハ營利ヲ目的トセサル社團法人ト同一ノ登録稅ヲ納ムルコトヲ要ス

社員名簿ノ記載ニ付テハ登録稅ヲ課セス

第九十一條 相互會社ニハ營業稅ヲ課セス

第四章 計算

第九十二條 保險會社ハ毎年一回一定ノ時期ニ於テ其帳簿ヲ閉鎖シ總會終結ノ後遲滞ナク財産目錄、貸借對照表、事業報告書、損益計算書及ヒ基金ノ償却、其利息ノ支拂、準備金並ニ利益又ハ剩餘金ノ配當ニ關スル決議書ヲ主務官廳ニ提出スルコトヲ要ス

第九十三條 保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ會社ノ定時總會終結ノ後前條ニ掲ケタル書類ノ閱覽ヲ求メ又ハ其謄本若クハ抄本ノ交付

保險業法 計算

ヲ請求スルコトヲ得但定款又ハ保險約款ノ定ムル所ニ依リ其謄本ハ抄本ノ交付ニ付キ手数料ヲ拂フコトヲ要ス

第九十四條 第九十二條ニ掲ケタル書類ノ書式ハ農商務大臣之ヲ定ム

第九十五條 保險會社ハ保險契約ノ種類ニ從ヒ各事業年度ノ終ニ於テ存スル契約ニ付キ責任準備金ヲ計算シ且之ヲ特ニ設ケタル帳簿ニ記載スルコトヲ要ス

第九十六條 生命保險ニ在リテハ保險契約者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ被保險者ノ爲メニ積立テタル金額ニ付キ會社財産ノ上ニ優先權ヲ有ス

第五章 罰則

第九十七條 主務官廳ノ免許ヲ得スシテ保險事業ヲ營ム者ハ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラレ

第九十八條 保險會社ノ取締役、監査役又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラレ

- 一 保險事業ニ非ケル事業ヲ爲シタルトキ
 - 二 生命保險ト損害保險トヲ併セテ營ミタルトキ
 - 三 主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキ
 - 四 主務官廳ノ検査ヲ妨ケタルトキ
 - 五 正當ノ理由ナクシテ本法ノ規定ニ依リ閱覽ヲ許スヘキ書類ヲ閱覽セシメス又ハ其謄本若クハ抄本ヲ交付セザリシトキ
 - 六 第十九條ノ規定ニ違反シテ利益ノ配當ヲ爲シタルトキ
 - 七 第二十二條ノ規定ニ違反シテ合併ヲ爲シタルトキ
 - 八 第九十五條ノ規定ニ違反シタルトキ
- 第九十九條 相互會社ノ發起人、取締役、監査役又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五百圓以下ノ過料ニ處セラレ
- 一 本法ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ
 - 二 本法ニ定メタル公告若クハ通知ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ不正ノ公告若ク

保險業法 罰則

ハ通知ヲ爲シタルトキ

三 第三十條第二項ノ規定ニ反シ入社申込證ヲ作ラズ、之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

四 定款、社員名簿、總會ノ決議錄、財産目錄、貸借對照表、事業報告書、損益計算書若クハ基金ノ償却、其利息ノ支拂、準備金、剩餘金分配ニ關スル議案ヲ事務所ニ備ヘ置カス、之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

五 商法第百八十一條ノ規定ニ依ル監督役ノ調査ヲ妨ケタルトキ
第百條 相互會社ノ發起人、取締役、監督役又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以上十圓以下ノ過料ニ處セラレ

一 官廳又ハ總會ニ對シ不實ノ申立ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ
二 第五十六條乃至第六十條ノ規定ニ違反シテ基金ヲ償却シ、其利息ヲ支拂ヒ又ハ剩餘金分配ヲ爲シタルトキ

三 第七十九條第一項ノ規定ニ違反シテ會社財産ヲ處分シタルトキ
四 商法第七十八條乃至第八十條ノ規定ニ違反シテ社員ノ責任ヲ減少シ又ハ合併ヲ爲シタルトキ

五 商法第百七十四條第二項又ハ民法第八十一條ノ規定ニ反シ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

第百一條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本章ニ定メタル過料ニ之ヲ準用ス

附則

第百二條 本法ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第百三條 商法施行法第九十五條乃至第百十六條ハ之ヲ削除ス

第百四條 本法施行前ニ設立シタル保險會社ニシテ其商號ニ保險ノ種類ヲ示ササルモノハ本法施行ノ日ヨリ三個月内ニ其商號ヲ改メ且本店及ヒ支店ノ所在

保險業法 附則

地ニ於テ其登記ヲ爲スルコトヲ要ス
 第二百五條 本法施行前ニ設立シタル保險會社ニシテ營業ノ免許ヲ受ケザリシモ
 其ノカ主務官廳ニ命令ニ違反シタル事ヲ裁判所ハ檢事ヲ請求ニ因リ又ハ職權
 ナリテ會社ノ解散ヲ命スルコトヲ得
 非訟事件手續法第二百六條第一項、第三百二十四條第一項、第三百三十五條及
 ヒ第三百三十五條ノ二ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二百六條 本法施行前ニ設立シタル合名會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノハ財
 産目錄及ヒ貸借對照表ヲ作ル毎ニ遲滞ヲ勿營業報告書、損益計算書及ヒ利益
 ノ配當ニ關スル案ト共ニ之ヲ主務官廳ニ提出スルコトヲ要ス
 第二百七條 本法施行前ニ設立シタル合名會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノハ財
 産目錄及ヒ貸借對照表ヲ作ル毎ニ保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取
 ルベキ者ハ其閱覽ヲ求メ又ハ其謄本若クハ抄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得但
 定款又ハ保險約款ノ定ムル所ニ依リ其謄本又ハ抄本ノ交付ニ付キ手数料ヲ拂

フコトヲ要ス

第二百八條 第三條、第四條、第八條乃至第十三條、第七十三條第二項及ヒ第七十
 四條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル保險會社ニ之ヲ準用ス
 第二百九條 本法施行前ニ設立シタル保險會社ニシテ相當ノ責任準備金ヲ積立テ
 サルモノハ本法施行ノ日ヨリ三個月内ニ其不足額填補ノ方法ヲ定メ主務官廳
 ノ認可ヲ申請スルコトヲ要ス但填補ノ期間ハ本法施行ノ日ヨリ十年ヲ超ユル
 コトヲ得ス
 前項ノ填補ヲ爲シタル後ニ非サレハ利益ノ配當ヲ爲スルコトヲ得ス
 第二百十條 第七十八條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル保險會社カ第二十一條
 又ハ商法第七十四條第三號、第五號、第七號、第一百八條、第二百二十一條
 第三號、第三號ニ掲ケタル事由ニ因リテ解散シタル場合ニ之ヲ準用ス
 第二百十一條 第九十三條及ヒ第九十三條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル合資
 會社又ハ株式會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノニ之ヲ準用ス

第一百十二條 第二十條乃至第二十二條及第七十七條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル株式會社ニシテ保險ヲ營業トスルモノニ之ヲ準用ス

第一百十三條 第九十八條ノ規定ハ本法施行前ニ設立シタル保險會社ノ業務ヲ執行スル社員ハ取締役及監査役及清算人ニ之ヲ準用ス

第一百十四條 保險會社ノ業務ヲ執行スル社員又ハ取締役ガ第四百條又ハ第九條ノ規定ニ違反シタルトキハ五圓以上五百圓以下ノ過料ニ處セラル

非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前項ニ定メタル過料ニ之ヲ準用ス

第一百十五條 外國人又ハ外國會社カ日本ニ支店又ハ代理店ヲ設ケテ保險事業ヲ營業シ場合ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

保險業法施行規則 (明治三十三年七月)
農商務省令第十五號

第一條 保險會社ノ發起人ハ發起ノ認可ヲ申請スルコトヲ要ス

前項ノ申請ヲ爲スニハ申請書ニ保險業法第五條及第六條ニ定メタル書類ヲ添附スルコトヲ要ス

第二條 發起認可ノ申請ハ株主又ハ社員ヲ募集スル場合ニ於テハ其募集前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三條 保險事業免許ノ申請ハ總取締役及ヒ總監査役ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス

申請書ニハ保險業法第五條及第六條ニ掲ケタル書類ノ外非訟事件手續法第九十八條第二項第二號乃至第六號及第九號ニ掲ケタル書類又ハ保險業法第八十四條第二項第二號第三號及第五號ニ掲ケタル書類ヲ添附スルコトヲ要ス

第四條 保險會社カ保險業法第八條ノ規定ニ依リ書類ノ變更ノ認可申請ヲ爲スニハ申請書ニ理由書ヲ添附スルコトヲ要ス

第五條 保險會社カ商法又ハ保險業法ノ規定ニ依リ登記ヲ爲シタルトキハ遲滞保險業法施行規則

ナク登記シタル事項及ヒ其登記ノ年月日ヲ農商務大臣ニ届出ルコトヲ要ス但社員名簿ニ爲シタル記載ハ此限ニ在ラス

第六條 保險會社ハ保險證券並ニ保險申込書ノ雛形及ヒ廣告ノ目的ヲ以テ調製シタル印刷物ヲ各一部ツツ農商務大臣ニ差出スコトヲ要ス

第七條 保險證券ニハ保險約款ノ全文ヲ記載シ又ハ之ヲ記載シタル書面ヲ添付スルコトヲ要ス

第八條 生命保險會社ハ保險業法第七條第六號及ヒ第七號ニ定メタル權利ノ範圍ニ付キ當事者ニ拂渡スヘキ金額其標準若クハ第十三號書式ニ準シ其金額ヲ推知スルニ足ルヘキ表ヲ保險證券ニ記載シ又ハ之ヲ記載シタル書面ヲ保險證券ニ添付スルコトヲ要ス

保險證券ニ對シ貸付ヲ爲スヘキコト又ハ將來ノ保險料ノ拂込免除ノ爲メニ保險金額ヲ減少スヘキコトヲ定メタルトキ亦同シ
第九條 保險會社カ其財産ヲ利用スルニハ左ニ掲ケタル各方法ニ付キ其五分ノ

一ヲ超ユルコトヲ得ス

一 無擔保貸付ヲ爲スコト

二 同一人ニ貸付又ハ預金ヲ爲シ又ハ同一人ヲ保證人トシテ貸付ヲ爲スコト

三 同一會社ノ株券若クハ債券ヲ取得シ又ハ之ヲ擔保トシテ貸付ヲ爲スコト

四 同一物件ヲ取得シ又ハ之ヲ擔保トシテ貸付ヲ爲スコト

前項第二號及ヒ第三號ニ掲ケタル方法ニ依リテ利用シタル金額ハ之ヲ通算ス
第十條 事業報告書ニハ左ノ事項ヲ記載シ取締役及ヒ監査役之ニ署名又ハ記名捺印スルコトヲ要ス

一 事業年度ニ於ケル定款又ハ普通保險約款ノ變更其他重要ナル事件

二 事業ノ成績(第一號書式ニ準ス)
三 生命保險及ヒ火災保險ニ在リテハ統計(生命保險ニ在リテハ第二號乃保險業法施行規則

三至第七號書式、火災保險ニ在リテハ第八號書式ニ準ス）
 第十一條 財産目錄、貸借對照表、損益計算書及ヒ基金ノ償却、其利息ノ支拂、準備金並ニ利益又ハ剩餘金ノ配當ニ關スル決議書ハ第九號乃至第十二號書式ニ準シテ之ヲ作ルコトヲ要ス

第十三條 財産目錄ノ一項目中ニ價額三千圓以上又モ五アルトキハ其項目ノ内譯シテ之ヲ記載スルコトヲ要ス
 第十三條 財産目錄及ヒ貸借對照表ハ未收保險料中ニ於テ事業年度ニ於テ收入スヘキ保險料ヲ算入スヘカラス

第十四條 保險會社ハ支拂備金トシテ左ノ金額ヲ積立タルコトヲ要ス
 一 事業年度ニ於テ保險金額又ハ拂戻金ノ支拂ヲ爲スヘキ場合ニ於テ未ダ其支拂ヲ爲ササルトキハ其金額
 二 事業年度ニ於テ生シタル事故ノ爲メニ保險金額又ハ拂戻金ノ支拂ヲ爲スヘキコトアリト認ムルトキハ其支拂ヲ爲スニ相當ナル金額

第十五條 生命保險會社ノ責任準備金ハ保險料積立金及ヒ未經過保險料ニ區別スルコトヲ要ス

第十六條 生命保險會社カ純保險料式ニ依リテ保險料積立金ヲ算出セサルトキハ貸借對照表中責任準備金ノ下ニ純保險料式ニ依リテ算出シタル金額ヲ附記シ之ヲ農商務大臣ニ差出スコトヲ要ス

第十七條 生命保險會社ノ未經過保險料ハ箇箇ノ契約ニ付キ之ヲ計算セサルトキハ其事業年度ニ收入シタル保險料ノ四分ノ一ヲ下ルコトヲ得ス

第十八條 損害保險會社ノ責任準備金ハ事業年度ニ於テ收入シタル保險料（再保險者ニ支拂ヒタル保險料ヲ控除ス）中ヨリ其年度ニ於テ保險料ヲ收入シタル契約ノ爲メニ支拂ヒタル保險金額（再保險者ヨリ得タル保險金額ヲ控除ス）其契約ノ爲メニ積立ツヘキ支拂備金及ヒ其年度ノ營業費ヲ控除シタル殘額ヲ下ルコトヲ得ス

第十九條 損害保險會社カ危險ノ發生セサル場合ニ於テ保險料ノ全部又ハ一部保險業法施行規則

ノ拂戻ヲ爲スヘキ契約ヲ爲ストキハ事業年度ニ收入シタル保険料中ヨリ先ツ
拂戻ニ充ツヘキ部分ヲ控除シ其殘額ニ付キ前條ノ計算ヲ爲スコトヲ要ス
會社ノ責任準備金ハ拂戻積立金ノ總額及ヒ前條ノ計算ニ依リテ生シタル殘額
ノ合計額ヲ下ルコトヲ得ス

第二十條 前二條ノ規定ニ依リテ計算シタル責任準備金カ保險契約ノ未經過期
間ニ對シ不足ナルトキハ會社ハ相當ノ増額ヲ爲スコトヲ要ス

第二十一條 責任準備金算出ノ爲メニ用ヒタル統計表、計算表其他算出ノ基礎
及ヒ順序ヲ知ルニ必要ナル材料ハ次回ノ責任準備金算出ヲ結了スルマテ之ヲ
保存スルコトヲ要ス

第二十二條 任意ノ解散ノ認可申請書ニハ理由書、總會ノ決議録、財産目錄、
貸借對照表及ヒ保險契約ノ整理ニ關スル案ヲ添附スルコトヲ要ス

第二十三條 合併ノ認可申請書ニハ保險業法第七十四條ニ掲ケタル書類ノ外理
由書總會ノ決議録及ヒ合併後存続スル會社又ハ合併ニ因リテ設立スル會社ノ

定款ヲ添附スルコトヲ要ス

合併ノ認可アリタル後六个月内ニ合併ノ手續ニ著手セサルトキハ認可ハ其效
力ヲ失フ

第二十四條 保險會社ノ發起人又ハ保險會社カ農商務大臣ニ差出スヘキ書類ハ
本店又ハ之タル事務所所在地ノ地方長官ヲ經由スルコトヲ要ス

前項ノ書類ハ強靱ナル美濃判大ノ紙料ヲ用ユルコトヲ要ス但印刷物ハ此限ニ
在ラス

第二十五條 保險會社ノ發起人又ハ保險會社カ農商務大臣ニ差出スヘキ書類ニ
シテ日本語ヲ以テ認メサルモノハ之ニ其譯文ヲ添附スルコトヲ要ス

第二十六條 保險會社ノ發起人又ハ保險會社カ農商務大臣ニ差出スヘキ書類中
外國ノ貨幣ヲ以テ價額ヲ示シタル項目ニハ大藏大臣カ告示スル内外貨幣比較

表ニ依リ日本ノ貨幣ニ換算シタル金額ヲ附記スルコトヲ要ス

第二十七條 前二十四條ノ規定ハ保險業法施行前ニ設立シタル保險會社ニ之ヲ

保險業法施行規則

準用ス但保險業法施行ノ日ヨリ六個月間ハ第八條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得
 第二十八條 保險業法施行前ニ設立シタル保險會社ノ定款ノ規定ニシテ本則ノ
 規定ニ牴觸スルモノハ其施行ノ日ヨリ六個月内ニ之ヲ改ムルコトヲ要ス
 第二十九條 保險業法施行前ニ設立シタル會社カ其財産ヲ利用シタル方法カ第
 九條ノ制限ニ反スルモ之ヲ改ムルコトヲ要セス但保險業法施行ノ後其利用ノ
 方法ヲ變更スルトキハ第九條ノ制限ノ趣旨ニ從フコトヲ要ス
 第三十條 商法施行前ニ設立シタル合名會社又ハ合資會社ニシテ保險ヲ目的ト
 スルモノカ其組織ヲ變更シテ之ヲ株式會社ト爲サントスルトキハ其認可申請
 書ニ理由書、決議錄、財産目錄及ヒ貸借對照表ヲ添附スルコトヲ要ス

附則

第三十一條 明治三十三年農商務省令第十一號ハ之ヲ廢止ス
 書式器ス

外國保險會社ニ關スル件(明治三十三年九月勅令第三百八十號)

第一條 外國會社カ日本ニ代理店ヲ設ケテ保險事業ヲ營ムトキハ日本ニ於ケル
 代表者ヲ定ムルコトヲ要ス
 商法第六十二條ノ規定ハ前項ノ代表者ニ之ヲ準用ス
 第二條 外國會社ハ其日本ニ於ケル事業ノ本據及ヒ代表者ノ氏名、住所ヲ主務
 官廳ニ届出ツルコトヲ要ス
 第三條 外國會社カ免許ヲ申請スルニハ申請書ニ左ノ書類ヲ添附スルコトヲ要
 ス

- 一 定款
 - 二 日本ニ於ケル事業ノ方法書
 - 三 普通保險約款
 - 四 保險料及ヒ責任準備金算出ノ基礎ニ關スル書類
- 外國保險會社ニ關スル件

五 最終ノ財産目録、貸借對照表及ヒ損益計算書

六 生命保險ヲ目的トスルモノニ在リテハ責任準備金利用ノ方法ヲ記載シタル書類

前項第一號乃至第四號及ヒ第六號ニ掲ケタル書類ノ變更ハ主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其效力ヲ生セス

第四條 外國會社カ主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキハ主務官廳ハ其日本ニ於ケル事業ノ停止若クハ代表者ノ改任ヲ命ジ又ハ免許ヲ取消スコトヲ得

第五條 主務官廳ハ必要ト認ムルトキハ外國會社ヲシテ相當ノ金額ヲ供託セシムルコトヲ得

外國會社カ供託ヲ命セラレタル場合ニ於テハ主務官廳ノ認許シタル有價證券ヲ以テ其金額ニ代フルコトヲ得

第六條 日本ニ於ケル保險契約者、被保險者、保險金額ヲ受取ルヘキ者又ハ外國相互會社ノ社員ハ供託物ノ上ニ優先權ヲ有ス

第七條 外國相互會社ノ日本ニ於ケル一般ノ債權者ハ社員及ヒ外國ニ於ケル債權者ニ對シ供託物ノ上優ニ先權ヲ有ス

第八條 外國會社ハ毎年一回一定ノ時期ニ於テ其日本ニ於ケル事業ノ報告書ヲ作り之ヲ主務官廳ニ提出スルコトヲ要ス

第九條 外國會社ノ本國ニ於テ作りタル財産目録、貸借對照表、事業報告書及ヒ損益計算書ハ遲滞ナク之ヲ主務官廳ニ提出スルコトヲ要ス

第十條 外國會社ノ代表者ハ定款、日本ニ於ケル社員ノ名簿及ヒ前二條ニ掲ケタル書類ヲ日本ニ於ケル事業ノ本據ニ備フルコトヲ要ス

日本ニ於ケル保險契約者、被保險者又ハ保險金額ヲ受取ルヘキ者ハ前二條ニ掲ケタル書類ノ閲覧ヲ求メ又ハ其謄本若クハ抄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得但定款又ハ保險約款ノ定ムル處ニ依リ其謄本又ハ抄本ノ交付ニ付キ手数料ヲ拂フコトヲ要ス

第十一條 外國會社カ其事業ヲ廢止シ又ハ免許ヲ取消サレタル場合ニ於テハ第
外國保險會社ニ關スル件

六條又ハ第七條ノ規定ニ依リテ優先權ヲ有スル者ニ辨濟ヲ爲シ又ハ擔保ヲ供スルニ非サレハ供託物ノ返還ヲ請求スルコトヲ得ス

第十二條 主務官廳カ日本ニ支店又ハ事務所ヲ設ケタル外國會社ノ免許ヲ取消シタルトキハ其處分確定ノ後遲滯ナク其旨ヲ支店又ハ事務所ノ所在地ノ登記所ニ通知スルコトヲ要ス

登記所カ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ支店又ハ事務所ノ登記ヲ抹消スルコトヲ要ス

第十三條 外國會社ノ代表者ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五百圓以下ノ過料ニ處セラレ

- 一 本令ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ
 - 二 第八條又ハ第九條ニ掲ケタル書類ヲ備ヘ置カス、之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ
- 第十四條 外國會社ノ代表者ハ左ノ場合ニ於テハ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處

セラレ

- 一 保險事業ニ非サル事業ヲ爲シタルトキ
 - 二 生命保險ト損害保險トヲ併セテ營ミタルトキ
 - 三 主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキ
 - 四 主務官廳ノ検査ヲ妨ケタルトキ
 - 五 主務官廳ニ對シ不實ノ申立ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ
 - 六 正當ノ理由ナクシテ本令ノ規定ニ依リ閱覽ヲ許スヘキ書類ヲ閱覽セシメス又ハ其謄本若クハ抄本ヲ交付セザリシトキ
- 第十五條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前二條ニ定メタル過料ニ之ヲ準用ス
- 第十六條 保險業法第一條、第三條、第四條、第七條、第九條乃至第十一條及ヒ第九十七條ノ規定ハ外國會社ニ之ヲ準用ス
- 第十七條 商法第九條、第十一條乃至第十五條、第十九條乃至第三十八條、第
- 外國保險會社ニ關スル件
- 四十五

四十條、第四十一條、第二百五十五條乃至第二百五十八條及ヒ保險業法第八十五條、第八十六條、第九十條、第九十一條ノ規定ハ外國相互會社ニ之ヲ準用ス

第十八條 各登記所ニ外國相互保險會社登記簿ヲ備フ

第十九條 外國相互會社カ日本ニ事務所ヲ設ケタル場合ニ於テ其登記ヲ申請スルトキハ會社ノ代表者ハ申請書ニ其日本ニ於ケル事業ノ本據及ヒ代表者ノ氏名、住所ヲ記載シ且之ニ左ノ書面ヲ添附スルコトヲ要ス

一 主タル事務所ノ存在ヲ認ムルニ足ル書面

二 代表者タル資格ヲ證スル書面

三 會社ノ定款又ハ會社ノ性質ヲ識別スルニ足ル書面

四 日本ニ於ケル社員ノ名簿

五 主務官廳ノ免許書又ハ其認證アル謄本

前項第一號乃至第三號ノ書面ハ會社ノ本國ノ管轄官廳又ハ日本ニ在ル領事ノ

認證ヲ受ケタルモノナルコトヲ要ス

第二十條 外國相互會社ノ代表者カ支配人ノ選任ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ其日本ニ於ケル事務所設立ノ登記ノ年月日ヲ記載シ且之ニ支配人ノ選任ヲ證スル書面ヲ添附スルコトヲ要ス

第二十一條 非訟事件手續法第三百二十九條、第四百十一條乃至第四百十九條、

第五百十一條、第五百十四條乃至第六十五條、第七十三條第一項、第七十四條第二項、第二百三條及ヒ第二百四條ノ規定ハ外國相互會社ニ之ヲ準用ス

第二十二條 第一條乃至第六條、第八條乃至第十一條及ヒ第十三條乃至第十六條ノ規定ハ外國人カ日本ニ支店又ハ代理店ヲ設ケテ保險事業ヲ營ム場合ニ之ヲ準用ス

附則

外國保險會社ニ關スル件 附則

第二十三條 本令ハ明治三十三年十一月十五日ヨリ之ヲ施行ス

第二十四條 本令施行前ニ日本ニ支店、事務所又ハ代理店ヲ設ケタル外國人又ハ外國會社ハ其施行ノ日ヨリ六箇月内ニ其日本ニ於ケル事業ノ本據ヲ主務官廳ニ届出ツルコトヲ要ス

第二十五條 第四條乃至第十五條、第十七條、第二十條、保險業法第一條、第三條、第四條、第九條乃至第十一條、第九十七條及ヒ非訟事件手續法第七十三條第一項、第七十四條第二項ノ規定ハ本令施行前ニ日本ニ支店、事務所又ハ代理店ヲ設ケタル外國人又ハ外國會社ニ之ヲ準用ス

外國保險會社ニ關スル件(明治三十三年十月) (農商務省令第十九號)

第一條 外國會社ノ保險事業ノ免許ノ申請ハ代表者ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス
申請書ニハ明治三十三年勅令第三百八十號第三條ニ掲ケタル書類ノ外本店又ハ

主タル事務所ノ存在ヲ認ムルニ足ル書類ヲ添附スルコトヲ要ス
第二條 外國會社カ明治三十三年勅令第三百八十號第三條第一項第一號乃至第四號及ヒ第六號ニ掲ケタル書類ノ變更ノ認可申請ヲ爲スニハ申請書ニ理由書ヲ添附スルコトヲ要ス

第三條 外國會社カ商法又ハ明治三十三年勅令第三百八十號ノ規定ニ依リ登記ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク登記シタル事項及ヒ其登記ノ年月日ヲ農商務大臣ニ届出ツルコトヲ要ス但社員名簿ニ爲シタル記載ハ此限ニ在ラズ
第四條 外國會社カ解散、合併又ハ組織變更ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツルコトヲ要ス

第五條 明治三十三年農商務省令第十五號、第六條乃至第八條、第十條及ヒ第十四條乃至第二十一條ノ規定ハ外國會社ノ日本ニ於ケル事業ニ之ヲ準用ス
第六條 明治三十三年農商務省令第十五號、第二十四條乃至第二十六條ノ規定ハ外國會社ニ之ヲ準用ス

外國保險會社ニ關スル件

第七條 前五條ノ規定ハ本令施行前ニ免許ヲ受ケタル外國會社ニ之ヲ準用ス但
本令施行ノ日ヨリ一年間ハ明治三十三年農商務省令第十五號、第八條ノ規定
ニ依ラサルコトヲ得

五十

附則

第八條 本令ハ明治三十三年十一月十五日ヨリ之ヲ施行ス

相互保險會社登記取扱手續(明治三十三年六月 司法省令第十八號)

- 第一條 相互保險會社登記簿ハ附錄第一號雛形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調
製スヘシ
- 第二條 相互保險會社登記見出帳ハ附錄第二號雛形ニ依リ之ヲ調製スヘシ
- 第三條 相互保險會社社員登記簿ハ附錄第三號雛形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之
ヲ調製スヘシ

第四條 登記所ニハ登記簿、社員名簿、見出帳及ヒ受附帳ノ外左ノ帳簿ヲ備フ

- 一 謄本抄本證明書交付帳
 - 二 相互保險會社登記申請書附屬書類送込帳
 - 三 受領證原符元帳
 - 四 決定原本送込帳
 - 五 登記簿謄本送込帳
 - 六 登記濟證交付帳
 - 七 抗告書類送込帳
 - 八 印鑑簿
- 第五條 相互會社ノ設立ノ登記ノ申請書ニハ設立ノ年月日ヲ記載スヘシ
- 第六條 登記所ニ差出スヘキ社員名簿ノ表紙ハ厚紙ヲ用井表面ニ(何々相互會
社)社員名簿ト記載シ裏面ニ其枚數ヲ記載シ申請人記名捺印スヘシ
社員名簿ノ用紙ニハ丁數ヲ記入シ且毎葉ノ綴目ニ契印ヲ爲スヘシ
- 相互保險會社登記取扱手續

五十一

前二項ノ場合ニ於テ取締役又ハ監査役カ多數ナルトキハ各一人ノ記名捺印又ハ契印ヲ以テ足ル

五十二

第七條 社員名簿カ二冊以上ナルトキハ申請人ハ各冊ノ表紙ニ其冊數ヲ記載スヘシ

第八條 社員名簿ノ記載ノ變更ノ申請ヲ爲ス場合ニ於テハ其申請書ニ變更シタル事項ノ記載アル用紙ヲ編綴セル社員名簿ノ冊數及ヒ丁數ヲ記載スヘシ

第九條 相互會社ノ設立ノ年月日ハ登記用紙中豫備欄ニ之ヲ記載スヘシ

第十條 登記官吏カ登記ヲ爲シタルトキハ社員名簿ノ表紙ニ登記番號、受附ノ年月日、受附番號及ヒ登記所ノ名稱ヲ記載スヘシ

第十一條 社員名簿ノ記載ノ變更ノ申請アリタルトキハ社員登記簿ノ登記用紙中番號欄ニ其登記簿ニ於ケル登記ノ順序ヲ追ヒテ新ナル番號ヲ記載シ其左側ニ變更シタル事項ノ記載アル社員名簿ノ冊數及ヒ丁數ヲ記載シ相當欄ニ保險業法第四十九條ノ規定ニ依リ社員名簿ニ記載シタル事項ヲ移シタル上變更欄

ニ其登記ヲ爲スヘシ

前項ノ手續ヲ爲シタルトキハ社員名簿中相當部分ノ餘白ニ社員登記簿第何冊第何丁ニ移シタル旨及ヒ年月日ヲ記載シ登記官吏捺印スヘシ

第十二條 社員ノ入社ニ因リ社員名簿ノ記載ノ變更ノ申請アリタルトキハ社員登記簿ノ登記用紙中番號欄ニ其登記簿ニ於ケル登記ノ順序ヲ追ヒテ新ナル番號ヲ記載シ相當欄ニ保險業法第四十九條ニ掲ケタル事項ヲ登記スヘシ

第十三條 社員ノ退社ニ因リ社員名簿ノ記載ノ變更ノ申請アリタルトキハ社員名簿中相當部分ノ餘白ニ其登記ヲ爲シ退社シタル社員ノ氏名ヲ朱抹スヘシ

若シ其社員カ社員登記簿ニ登記セラレタル者ナルトキハ社員登記簿ノ登記用紙中變更欄ニ退社ノ登記ヲ爲シ登記番號及ヒ其社員ノ氏名ヲ朱抹スヘシ

第十四條 社員登記簿ノ登記用紙中或欄カ登記ヲ爲スヘキ餘白ナキニ至リタルトキハ新ニ番號欄ニ前番號ヲ轉寫シ其左側ニ第二ノ文字、前番號ノ用紙ヲ編

相互保險會社登記取扱手續

五十三

綴セル社員登記簿ノ冊數、丁數及ヒ其繼續用紙ナルモノヲ記載シ社員ノ氏名、住所欄ニ社員ノ氏名、住所ヲ移シタル上登記ヲ爲スヘシ
 前項ノ手續ヲ爲シタルトキハ前用紙ノ番號ノ左側ニ第一ノ文字並ニ繼續用紙ヲ編號セル社員登記簿ノ冊數、丁數及ヒ之ニ繼續スル旨ヲ記載スヘシ
 前二項ノ規定ハ第三以下ノ繼續用紙ヲ設ケル場合ニ之ヲ準用ス
 第十五條 不動産登記法施行細則第四條、第五條、第十二條、第二十條乃至第二十四條、第二十七條、第三十三條乃至第三十九條、第四十七條、第五十一條及ヒ商業登記取扱手續第五條乃至第七條、第九條乃至第二十條、第二十一條第一項、第三項、第二十三條乃至第三十三條、第四十四條乃至第四十六條ノ規定ハ相互保險會社ノ登記ニ之ヲ準用ス

附則

受附番號ハ明治三十三年分ニ限リ七月一日ニ始メ十二月三十一日ニ止ムヘシ

相互保險會社登記簿謄本抄本等ノ手数料ノ

件(明治三十三年六月) 司法省令第十九號

相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求等ニ關スル手数料ニ付テハ明治三十二年司法省令第十四號第一條及ヒ第三條乃至第六條ノ規定ヲ準用ス

外國相互保險會社登記簿謄本抄本等ノ手數

料ノ件(明治三十三年九月) 司法省令第三十六號

外國相互保險會社登記簿ノ謄本又ハ抄本ノ交付ノ請求等ニ關スル手数料ニ付テハ明治三十二年司法省令第十四號第一條及ヒ第三條乃至第六條ノ規定ヲ準用ス

商法中署名スヘキ場合ニ關スル件(明治三十三年) 法律第十七號

相互保險會社ノ登記簿謄本抄本等ノ手数料ノ件 五十五
 外國相互保險會社登記簿謄本抄本等ノ手数料ノ件
 商法中署名スヘキ場合ニ關スル件

商法中署名スヘキ場合ニ於テハ記名捺印ヲ以テ署名ニ代フルコトヲ得

商法施行前ニ登記ナキ株式會社ノ登記ニ關

スル件(明治三十三年
法律第四十九號)

農工銀行法ニ依リ設立シタル株式會社ニシテ商法施行前ニ商法中登記ヲ要スヘキ事項ニ付登記ナキモノハ本法施行ノ日ヨリ三箇月以内ニ其ノ登記ヲ爲スコトヲ要ス

保險業法制定商法施行法第九十五條乃至第

百十六條削除(明治三十三年
法律第六十九號)

保險業法附則

第三條 商法施行法第九十條乃至第一百十六條ハ之ヲ削除ス

小商人ノ範圍ニ關スル件(明治三十二年六月 勅令第二百七十一號)

商行爲ヲ爲スヲ業トスルモ資本令額五百圓ニ滿タサル者ハ之ヲ小商人トス

附則

此勅令ハ商法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商法第五百六十二條ニ掲クル書類ノ件

(明治三十二年五月
遞信省令第十九號)

第一條 海員名簿ハ第一號書式、器具目錄ハ第二號書式、航海日誌ハ第三號書式、旅客名簿ハ第四號書式ニ依リ之ヲ調製スルシテ、前項ノ書類ハ書式ニ示ス順序ニ依リ之ヲ編綴シ且各頁ニ頁數ヲ附スヘシ但其紙數ハ適宜トス

商法施行前ニ登記ナキ株式會社ノ登記ニ關スル件 五十七
保險業法制定商法施行法第九十五條乃至第一百十六條
削除 小商人ノ範圍ニ關スル件 附則 商法第五百
六十二條ニ掲クル書類ノ件

第二條 前條ノ書類ニハ管海官廳ノ認可ヲ經テ書式ニ定メサル事項ヲ記載スル
爲メ欄ヲ設クルコトヲ得旅客名簿及航海日誌ハ沿海航船及航路限定内國ニ
限リタル近海航船ニ在リテハ管海官廳ノ認可ヲ經テ書式ニ定ムル事項ヲ省略
スルコトヲ得

第三條 第一條ノ書類ニハ各事項ニ付英譯ヲ附シ又ハ頁ノ上部ニ船舶及船舶所
有者ノ名稱等ヲ附記シ又ハ記載心得等ヲ掲グルコトヲ得

第一條ノ書類ハ書式ニ定ムル事項ノ位置ヲ變更シテ之ヲ調製スルコトヲ得但
其順序ヲ變更スルコトヲ得

商法施行法第二百二十二條ノ規定ニ依リ湖川、

港灣及沿岸小航海ノ範圍ノ件(明治三十二年五月一 遞信省令第二十號)

湖川、港灣ノ範圍ハ平水航路ノ區域ニ依ル

沿岸小航海ノ範圍ハ播磨國明石川口西岸ヨリ淡路國江崎ニ至ル線、淡路國押登
崎ヨリ阿波國大磯崎ニ至ル線、伊豫國佐田岬ヨリ高島ヲ經テ豊後國地蔵崎ニ至
ル線及豊前國部埼ヨリ長門國宇部村ニ至ル線ヲ以テ限ラレタル内海トス

● 民事訴訟法

民事訴訟法

民事訴訟法施行條例

民事訴訟費用法

民事訴訟用印紙法

家資分散法

民事訴訟法第十四條ニヨリ國子代表スル規定

民事訴訟費用法中改正

訴訟書類郵便送達手数料

民事訴訟法第五十二條ニ依ル送達ノ囑託手續準據方

民事上告豫納金手續

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行
スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十三年三月二十七日

農	外	遞	文	陸	大	司	海	內閣總理大臣兼內務大臣
務	務	信	部	軍	藏	法	軍	伯爵山縣
大	大	大	大	大	大	大	大	伯爵西郷
臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	伯爵山田
子爵	子爵	子爵	子爵	子爵	子爵	子爵	子爵	伯爵松方
碧	青	後	榎	大	山	方	正	伯爵大森
村	木	藤	本	武	山	方	正	伯爵大森
通	周	象	二	武	山	方	正	伯爵大森
俊	藏	二	郎	武	山	方	正	伯爵大森

法律第二十九號

民事訴訟法目錄

第一編 總則

第一章 裁判所

- 第一節 裁判所ノ事物ノ管轄
- 第二節 裁判所ノ土地ノ管轄
- 第三節 管轄裁判所ノ指定
- 第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意
- 第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避
- 第六節 檢事ノ立會

第二章 當事者

- 第一節 訴訟能力
- 第二節 共同訴訟人

民事訴訟法目錄

一	一	一	一	四	九	九	十	十	十	十	十	十一
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁
一	八	五	五	四								

第三節	第三者ノ訴訟參加	二十一丁
第四節	訴訟代理人及ヒ輔佐人	二十五丁
第五節	訴訟費用	二十九丁
第六節	保證	三十五丁
第七節	訴訟上ノ救助	三十七丁
第三章 訴訟手續		
第一節	口頭辯論及ヒ準備書面	四十一丁
第二節	送達	四十一丁
第三節	期日及ヒ期間	五十一丁
第四節	懈怠ノ結果及ヒ原狀回復	五十九丁
第五節	訴訟手續ノ中斷及ヒ中止	六十三丁
第二編 第一審ノ訴訟手續		
		六十五丁
		六十九丁

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續		
第一節	判決前ノ訴訟手續	六十九丁
第二節	判決	七十丁
第三節	調停判決	八十二丁
第四節	計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル 訴訟ノ準備手續	八十八丁
第五節	證據調ノ總則	九十四丁
第六節	人證	九十七丁
第七節	鑑定	百一丁
第八節	書證	百十四丁
第九節	檢證	百十八丁
第十節	當事者本人ノ訊問	百二十六丁
第十一節	證據保全	百二十七丁
民事訴訟法目錄		
		百二十九丁
		三

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第二節 督促手續

第三編 上訴

第一章 控訴

第二章 上告

第三章 抗告

第四編 再審

第五編 證據訴訟及ヒ爲替訴訟

第六編 強制執行

第一章 總則

四

百三十一丁

百三十二丁

百三十四丁

百四十丁

百五十丁

百五十七丁

百六十一丁

百六十八丁

百七十二丁

百七十二丁

百七十二丁

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制

執行

百九十九丁

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第二款 有體動産ニ對スル強制執行

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制

執行

第四款 配當手續

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第二款 強制競賣

第三款 強制管理

民事訴訟法目錄

五

二百十丁

二百二十一丁

二百二十五丁

二百二十五丁

二百二十六丁

二百五十一丁

第三節 船舶ニ對スル強制執行

二百五十六丁

第三章 金銭ノ支拂ヲ目的トセサル

債權ニ付テノ強制執行

二百五十九丁

第四章 假差押及ヒ假處分

二百六十二丁

第七編 公示催告

二百七十一丁

第八編 仲裁手續

二百七十七丁

民事訴訟法施行條例

二百八十四丁

民事訴訟費用法

二百八十七丁

民事訴訟用印紙法

二百九十丁

家資分散法

二百九十四丁

民事訴訟法第十四條ニヨリ國ヲ代表

スル規定

二百九十六丁

出

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

- 第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ
- 第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ
- 第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス
果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴
ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス
- 第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲クルモノヲ除ク
外其額ヲ合算ス

民事訴訟法 總則、裁判所、裁判所ノ事物ノ管轄

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 貸貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一ノ年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一ノ年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

所裁判ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

民事訴訟法 總則、裁判所、裁判所ノ事物ノ管轄

移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ
移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スル
モノト看做ス

四

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ
付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所ト
ス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役
スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ裁判籍
上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付

テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マ
ル若シ其現在地ノ知レサルガ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住
所ニ依リテ定マル

然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限
リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定
マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ
財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキ
ハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキ
ハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク

民事訴訟法

總則、裁判所、裁判所ノ土地ノ管轄
(裁判籍)

五

寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 内國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財産又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財産ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財産ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行爲ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラズ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權處ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

民事訴訟法 總則、裁判所、裁判所ノ土地ノ管轄

(裁判籍)

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル入權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産ノ裁判籍ニ訴ヲ起スコキ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス
管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

民事訴訟法 總則、裁判所、管轄裁判所ノ指定、裁判 九
所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サニシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セズ

第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ

當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者、共同義務者若クハ價還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受ケルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受ケルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルコト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得
偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルト

民事訴訟法 總則、裁判所、裁判所職員除斥及ヒ忌避 十一

キ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 判事が法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セシメテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告が判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ疏明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フヘシ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ總テノ行爲ヲ避クヘシ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス

民事訴訟法 總則、裁判所、裁判職員ノ除斥及ヒ忌避 十三

可シ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラルル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲ス

民事訴訟法 總則、當事者、訴訟能力

シムル能力ト法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴訟起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限り特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得
裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ

任スルコトヲ得

此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受ケルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴

訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限り左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法（證據方法ヲ包含ス）ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲スヘキ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

民事訴訟法 總則、當事者、共同訴訟人

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトナ間ハ原告。被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルナ間ハ權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相牴觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若ク

民事訴訟法 總則 當事者 第三者ノ訴訟參加

ハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラザリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セザリシトキニ限リ其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

第五十六條 從參加人本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ

從參加人ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從

參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人其關係ヲ説明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テ之ノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告

ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ脱退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ケ可キコトヲ恐ルル場合ニ

民事訴訟法 總則、當事者、第三者ノ訴訟參加 二十三

於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程

度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相

手方ニハ其謄本ヲ送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラズ之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者ト

シテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシム

ル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ
本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得
第三者カ被告ノ主張ヲ等フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立

ニ應スルコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ
引受クルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨ
リ脱退セシム可シ其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ效力ヲ有シ且之ヲ執行
スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理
人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代
理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人
ト爲スコトヲ得

民事訴訟法 總則、當事者、訴訟代理人及ヒ輔佐人 二十五

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私書證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受ケルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ抛棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請

求ヲ認諾スル權ヲ有セス

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ效力ナシ

然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ケ外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其效力ナシ

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其效力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其效力

民事訴訟法 總則、當事者、訴訟代理人及ヒ輔佐人 二十七

ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ満了後ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ

取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セザルトキニ限リ原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

第五節 訴訟費用

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル
訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ抛棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ

民事訴訟法 總則、當事者、訴訟費用

相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出

シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス

然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セサ

リシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定

ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得サリシトキハ當事者ノ一

方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作為ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタル

ニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論

ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滞ヲ生セ

シメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス此カ爲ニ生シ

タル費用ヲ負擔ス可シ
第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法（證據方法ヲ包含ス）ヲ主

張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス其方法ノ

費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若

クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟

ノ總費用（上訴ノ費用ヲ包含ス）ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之

ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ

防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上

訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ

費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此

限ニ在ラス

民事訴訟法 總則、當事者、訴訟費用

三十一

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然

レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ限り費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルトキト雖モ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依

ルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ検査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ分増ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其

費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生ゼス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

民事訴訟法 總則、當事者、保證

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハズ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タヌコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目付トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ヲナス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限り之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タヌコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及

民事訴訟法 總則、當事者、訴訟上ノ救助

其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制

執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコ

トヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求

ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ヲナス又ハ見込ナキニ非ス

ト見ユルヤヲ調査スルコトヲ要セス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリントキ又ハ消滅シタ

ルトキハ何時ヲ以テモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅

ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ效力ヲ生

ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟済スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ

求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告

ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ

得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及

ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟済ヲ免除シタル裁判

費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、

抛棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツル

コトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件
アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ
取立ツルコトヲ得

第百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害
セシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七
條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與竝ニ辯護士附添
ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲
ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコ
トヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限り抗告ヲ爲スコトヲ得
辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ
命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此
法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラ
ス

第百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴
訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立
民事訴訟法 總則訴訟手續、口頭辯論及ヒ準備書面 四十二

第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用井ントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七 年月日

第六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲グルコトヲ得ス

第七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書コ既ニ相手方ニ知ラルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮シ

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコト

ニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡ス

第十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ採用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルト

民事訴訟法 總則、訴訟手續、口頭辯論及ヒ準備書面 四十三

キハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

第百十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思
カ顯レサルトキハ自白シタルモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニ
非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタ
ルモノト看做ス

第百十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存ス
ルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證
明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サ
シム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ其問ヲ發ス可キ旨
ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキトハ相手方ノ利益ト爲ル可キ
答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シ
タル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁
判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身
出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ採用シタル證書ニシテ其手中ニ存スル
モノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコ
トヲ得

民事訴訟法

總則 訴訟手續、口頭辯論及ヒ準備書面 四十五

第一百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ
關スルモノヲ提出スヘキコトヲ得

第一百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

第一百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ
付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第一百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタ
ルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得

第一百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫
屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物
タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第一百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判力他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ
定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマ

テ辯論ヲ中止ス可シ

第一百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟
手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影
響ヲ及ホストキニ限ル

第一百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命令ヲ取消スコトヲ得

第一百二十四條 裁判所ハ閉チタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第一百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハ
シム但裁判所構成法第一百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第一百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者聾又ハ啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會
セシムルコトヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第一百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ
訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演
述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第二百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第一 辯論ノ場所、年月日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告關席シタルトキハ其關席シタルコト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第二百三十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

民事訴訟法 總則、訴訟手續、口頭辯論及ヒ準備書面 四十九

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第三百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係入ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係入ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第三百三十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第三百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事方法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム
前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第三百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第三百三十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

第三百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

第三百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可

民事訴訟法 總則 訴訟手續 送達

キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百二十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百二十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第四百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第四百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限り其代理人ニ之ヲ爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ效力ヲ有ス

第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ

假住所選定ノ届出ハ遅クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達

民事訴訟法 總則、訴訟手續、送達

ハ其書類ノ原告者クハ被告ニ到達スルト否トテ問ハス又何時ニ到達スルトテ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四百四十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其他ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限リ效力ヲ有ス

第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ特聘ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限リ效力ヲ有ス

第四百四十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ

住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十七條 第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十八條 前二項ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百四十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲スコトヲ得但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百四十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類

送達ノ場所ニ差置ク可シ

第五百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルノキニ限リ之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル贈本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限リ效力ヲ有ス

第五百十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載シ得

第五百十三條 第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第五百十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判長之ヲ發ス送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第五百十六條 原告若クハ被告ノ所在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ民事訴訟法 總則、訴訟手續、送達 五十七

送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從ラズ其效テキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ揭示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所、當事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲グルコトヲ要ス

第五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期間ヲ定ムルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附

ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間
第五十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム
第六十條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限り日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ得
第六十一條 期日ニ付テハ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在延シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セズ
第六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラズ
第六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

民事訴訟法 總則、訴訟手續、期日及ヒ期間 五十九

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ怠リタル
事ヲ正看做ス

第六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ
送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セザル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル
但期間指定ノ際此ヨリ遅キ起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以
テスルモノハ初日ヲ算入セス

第六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一個月ノ期間ハ三十日トシ一年ノ
期間ハ曆ニ從フ

第六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ
爲メ其住居地下裁判ノ所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸
長スハ里以外ノ端數三里ヲ超ユルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ナ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期
間ヲ定ムルコトヲ得

第六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分
ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ
休暇ノ終ヲ以テ始マル

前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス
不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル

休暇事件トハ裁判所構成法第二百二十八條、第二百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂
フ

第六十九條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ
又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ
除ク外顯著ナル理由アルトキニ限リ之ヲ許ス

第七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又
民事訴訟法 總則、訴訟手續、期日及ヒ期間 六十一

ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ハ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス
伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ満了ヨリ之ヲ起算ス

第七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テシテ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得
同一期日ノ再度ノ變更ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セサルトキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限り之ヲ許スコトヲ得又相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證ハルトキニ限り之ヲ許スコトヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非サル

ハ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テシテ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立タルコトヲ得ス

第七十二條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事亦其定ム可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第七十三條 訴訟行為ヲ怠リ或ハ原告若クハ被告ハ其訴訟行為ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サレタルモノニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第七十四條 天災其他避ク可カラサル事變ニ爲シ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

民事訴訟法 總則 訴訟手續 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復 六十三

回復

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スレテ闕席判決ノ送達ヲ知ラザリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス

右期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス

懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一十年ノ満了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行為ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 原狀回復ノ原因タル事實
- 第二 原狀回復ノ疏明方法
- 第三 懈怠シタル訴訟行為ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テハ訴訟手續ハ追完スル訴訟行為ニ付テハ訴訟手續下之ヲ併合ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テハ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行為ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス
原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ

民事訴訟法 總則、訴訟手續、訴訟手續ノ中斷及ヒ 六十五
中止

受繼ケテ之ヲ中斷ス
受繼ヲ遲滞シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シ
或ル因シト看做シ且裁判所ハ開席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリ
會渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ
申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第七十九條 原告若クハ被告ハ破産ニ付キ破産ヲ開始シタル場合ニ於テ訴訟
手續ヲ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破
産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス
第八十條 原告若クハ被告ハ破産ノ能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又
ハ其代理權カ原告若クハ被告ハ破産ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手
續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其在設テ相手方ニ通知シ又ハ相手方

カ訴訟手續ヲ履行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス
第八十一條 原告若クハ被告ハ破産ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル
訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルトキハ前條ノ規定又遺產
ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第七十九條ノ規定ヲ適用ス

第八十二條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ
繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第八十三條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡
シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルト
キハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

第八十四條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令、戰爭
其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ヲ交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受訴裁判所ハ

民事訴訟法 總則 訴訟手續、訴訟手續ノ中斷及ヒ 六十七
中止

申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコトヲ得

第百八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百八十六條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル效力ヲ有ス
中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ其效力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲スコキ裁判ノ言渡ヲ妨クルコト無シ

第百八十七條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受續及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送

達ス可シ

第百八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ルルマテ之ヲ休止ス

一 个年内ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケケルモ亦ト看做ス

第百八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 六十九
手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第九十條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ビ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ビ其請求ノ一定ノ原因

第三 一定ノ申立

其他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價額ヲ掲グ可シ

第九十一條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ

此限ニ在ラス

第九十二條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第九十三條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ尠ナクトモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ履行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス

權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付テ他ノ裁判

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 七十一

手續判決前ノ訴訟手續

所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第一 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ

第二 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告力異議ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラス

第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セシメ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フルコトヲ得

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト
第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下ケルコトヲ得

訴ノ取下ケ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲ササルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ケ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ
適法ナル取下ケ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ス
取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

第九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キコトヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス
第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 七十三
手續、判決前ノ訴訟手續

然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辯書差出シノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ヲ相殺シ爲ス可キ場合ニ於テ同時ニ被告方自己ノ過失ニ因ラヌシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲノ生ス可キトキハ此限ニ在ラス

相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得
前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルトキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ
口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百五條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟手續、判決前ノ訴訟手續 七十五

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可
左ニ掲クルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

第一 無訴權ノ抗辯

第二 裁判所管轄違ノ抗辯

第三 權利拘束ノ抗辯

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未済ノ抗辯

第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有效ニ拋棄
スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其
抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ
得

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立

ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲
シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申
立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯
論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯ヲカタルトキハ其完結後
之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法（反訴、抗辯、再抗辯等）ハ第二百一條ニ規

定スル制限ヲ以テ判決ニ援著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコ
トヲ得

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ
許スニ於テハ訴訟ヲ遅延可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメントスル故意ヲ以

民事訴訟法

第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟手續、判決前ノ訴訟手續

テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシトシテ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百十一條 訴訟ノ進行中ニ爭ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ボストキハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ申立ツルコトヲ得

第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セザル請求ノ權利拘束ノ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁メン爲ニ用弁シトスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條ノ規定ヲ準用ス

第二百十五條 證據調竝ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲ス可シ

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セザル限り辯論ノ全旨趣及ヒ或ハ證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 七十九
手續、判決前ノ訴訟手續

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證ス可シ

裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キトキハ裁判官ヲ

シテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時

ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ疏明ノ方法トシテハ之ヲ許サス

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又ハ受命判

事者クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル等點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ム

ル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シテ

之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ

本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十三條 前條ノ申立テ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面

ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ附加、削除其他ノ變更

ニ係ルヲ問ハス申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可

キ爲メ差出シタル書面ニ依リテ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且裁判所書記ヲシテ其正本、抄本

及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限り當事者ノ承諾ナクシテ

訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本竝ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類竝ニ評議又ハ處罰ニ關ス

ル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハス之ヲ閱覽スルコトヲ許サス

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續 地方裁判所ノ訴訟 八十二

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁
判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲ス
ニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中
ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟
スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス
然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセザルトキハ之ヲ爲
ササルコトヲ得

第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ
爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ等アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因
ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決
確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付
キ辯論ヲ爲スコキヲ命スルコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾
スルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗

訴ノ言渡ヲ爲スコシ

第二百三十條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス

然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルトキ
ハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ

第二百三十一條 裁判所ハ申立テザル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシムル權ヲ

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 手續判決 八十三

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ
判決ヲ爲ス可シ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決
ニ讓ルコトヲ得

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ニ限リ之ヲ爲
ス

第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於
テ之ヲ言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス闕席判決ノ言渡
ハ其主文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ
朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告クヘシ

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラズ
其效力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ履行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若
クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除ケ外相手方ニ其判決ヲ送達スル
ト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所

第二 事實及ヒ争點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出
シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事
署名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長
差支アルトキハ官等最高陪席判事之ヲ附記ス

民事訴訟法 第一ノ決訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 八十五
手續、審判

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ヲ送達アラシムコトヲ申立タルコトヲ得其申立アルタルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百三十九條 未ダ判決ヲ言渡サズ又ハ未ダ判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記ハ其正本ハ抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本ハ抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シ之ヲ認證ス可シ

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ纏束セラル

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ謬算、書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得
右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 主タル請求者クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部者クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ

判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササルトキハ遅クトモ判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 八十七

手續、判決

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定力ヲ有ス

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條、第二百三十四條ノ規定 裁判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條、第二百三十九條及第二百四十條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡チ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡チ爲ササル裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節 闕席判決

第二百四十六條 原告者クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ爲ス

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

第二百五十條 原告者クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスニシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條 原告者クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實、證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用ス

第二百五十二條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ被告カ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ闕席判決ヲ爲ス

第二百五十三條 原告者クハ被告口頭辯論ノ延期ヲ申立シルコトヲ得

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 八十九
手続 闕席判決

第一 出頭シタル原告若クハ被告ハ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ
第二百五十三條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサリシ原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲ス

第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルコトヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告ガ合式ニ呼出サレサリシトキ
第二 出頭セサル原告若クハ被告ガ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルトキ

出頭セサリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十五條 闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決送達ノ前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲ス可キトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲ス可キトキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得

第二百五十六條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申出テラレタル闕席判決ノ表示

民事訴訟法 第一審ノ訴訟手續、地方裁判所ノ訴訟 九十一
手續、闕席判決